

---

公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会

# 特別支援学校

---

スポーツ研究成果報告書 2021 (No. 5)



スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである。

また、スポーツは、人と人との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである。さらに、スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠である。～「スポーツ基本法 前文」より～

# 巻 頭 言

2022年度は、我が国の特別支援学校スポーツ界で画期的な年になります。それは、一般財団法人日本ライオンズが主催する全国特別支援学校フットサル大会が開催されるからです。



この大会は、全国9地区の地区大会を勝ち抜いた学校が集まって覇を競うこととなります。北海道地区は、当法人主催の第6回小野寺眞悟杯特別支援学校フットサル大会が北海道予選を兼ねることとなります。第1回全国特別支援学校フットサル大会は、2022年11月5日（土）、札幌市で開催されます。是非、皆様方からの声援を頂ければ幸いです。

小野寺眞悟杯特別支援学校フットサル大会は、2020年第4回大会と2021年第5回大会の2大会共に、コロナ感染症拡大により中止されましたが、第6回大会は2022年7月29日（金）、北海道立野幌総合運動公園総合体育館で開催します。この大会には、台北駐日経済文化代表処教育部黄完超部長を通して、臺北市立臺北特殊教育學校と台北市立啓聰学校の参加が見込まれておりますし、江別市及び江別市教育委員会の協力連携の下で、江別市民との触れ合いなども進められる予定としております。

さて、今年度の当財団研究助成に基づくスポーツ研究成果報告書2021（No.5）は、各研究助成校で指導実践された内容を実践教育論文として整理・考察され、研究担当者が執筆した極めて現場に即した貴重な内容となっておりますので、特別支援教育をご担当されている教師の皆様方には、日常の教育実践を豊かにするための示唆を与えるものと期待しております。

2021年東京オリンピック・パラリンピックでは、14歳の四肢障がい山田美幸さんがパラスポーツの醍醐味を体現され、国民の多くの方々に大きな感動を与えたのは記憶に新しいことです。パラスポーツは、パラリンピック競技種目だけではなく、障がいのある方々が行う全てのスポーツを指し示す言葉として、パラリンピック東京大会を機に広く認識されるようになってきました。このこともあり、当法人は、「公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会」に改称し、より一層、障がいのある児童生徒のスポーツ活動の発展・充実のために寄与すべく努めてまいります。

2022年令和4年3月

公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会

理事長 小野寺 眞 悟

# 目 次

## 巻 頭 言

公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会  
理事長 小野寺 眞 悟

## 論 考

未来に向けたオリ・パラ体験～特別支援学校のスポーツ活動の充実に向けて～  
元日本アンパティサッカー協会強化アドバイザー  
北海道教育大学岩見沢校教授 越 山 賢 一 1

## 実践研究 1

三角山分校の体育授業の実践を通して  
～神経筋疾患の生徒のコミュニケーション能力の向上を目指して～  
北海道手稲養護学校三角山分校教諭 小野寺 織 絵 4

## 実践研究 2

知的発達障害のある生徒に合ったトレーニング方法をさぐる  
～本校サッカー部の実践から～  
市立札幌みなみの杜高等支援学校教諭 明 杖 子 竜 10

## 実践研究 3

第 35 回北海道肢体不自由養護学校体育大会  
～With コロナ オンライン開催に向けた取組～  
北海道真駒内養護学校教頭 渡 邊 憲 幸 16

## 実践研究 4

北海道肢体不自由養護学校体育大会新種目提案に向けた取組について②  
～特別支援学校間のハンドアーチェリー・オンライン交流内容の検討と補助具の開発を  
通して～  
北海道拓北養護学校教頭 安 達 雅 美 26

## 実践研究 5

ソフトボール部の指導や取り組みについて  
～市民大会への参加を目指して～  
北海道紋別高等養護学校教諭 杉 原 良 太 34

## 実践研究 6

多様な障害に応じたスポーツ活動の工夫、開発  
北海道網走養護学校教諭 古 谷 太 一 44

## 実践研究 7

ランプ用ボールとランプを使ったボッチャの授業改善  
北海道札幌養護学校共栄分校教頭 越 田 淳 54

## 実践研究 8

サッカー部における動画を用いた基礎技術の定着(2)  
新篠津高等養護学校教諭 松 山 佳 樹 60

## 未来に向けたオリ・パラ体験

### ～特別支援学校のスポーツ活動の充実に向けて～

元日本アンパティサッカー協会強化アドバイザー  
北海道教育大学岩見沢校教授 越山 賢一

#### はじめに

2021年、1年遅れの2020東京オリンピックとパラリンピックは日本選手の活躍もあり、記録と記憶に残る大会として幕を下ろしました。開催都市である東京都ではコロナの第5波が猛威を振り、医療機関が逼迫し、コロナの急激な蔓延はなんとしても押さえなければならぬ状況でしたから開催反対が向かい風となる厳しい状況でした。

しかし開幕100日を切った辺りから、オリンピック開催に舵が切られました。その後、マスコミによる情報量が多くなるとともに、関係各位の尽力、医療機関従事者やボランティアの活躍、さらに選手の強い自覚のアウトプットによって少しずつ国内の熱が高まってきました。

その中で残念なことは、メダルの色や数に固執する報道が目についたことです。スポーツはその種目において平等なルールのもとで優劣を競います。したがって力があってもメダルに届かなかった選手、参加選手の中で一番の努力をした選手、生活のすべてを投げ打って大会に臨んだ全ての選手の首にメダルが下げることが出来ない、というスポーツの残酷な一面を伝えきれていなかった事です。メダルを取ることが我々には想像もつかない名誉な事ですが、メダルを取れなくても胸を張ることの出来る選手は多いはずで、負けたことや自分自身の目標を越えられなかったなどの悔しさはあるでしょうが、そこから生まれるスポーツの喜びや達成感、あるいは難しさなど、もう少し発信してもらいたいと思ったのは私だけではないでしょう。

選手たちの人知れない努力や苦勞、押しつぶされそうな精神的プレッシャー、達成した喜びや開放感といったさまざまな感情を感じ取り理解することはきっと困難だと思います。それでも選手たちの何十分の1、何百分の1でもそれを共有しようとテレビの前で応援し、研ぎ澄まされた選手の

技量や垣間見れる人間性に心を打たれました。私は特にボッチャの杉村英孝選手の神業と言えぬ投球に声を上げるほど魅せられました。想像を超える集中力から繰り出されるコントロールの効いた投球にはハンデがあるからではなく、純粹にスポーツの持つ魅力によるものだと改めて認識させられました。

#### オリ・パラへの理解

オリンピックやパラリンピックに参加する選手を私たちは何と呼んでいたのでしょうか。オリンピックアスリート、パラリンピックアスリートと呼ぶのが一般的のようですが、「オリンピック」に加え「パラリンピアン」を知ったことは、障害者理解の契機になったのではないのでしょうか。

パラリンピックの起源は第2次世界大戦で脊椎を損傷した兵士のリハビリとして、1948年にロンドン郊外のストーク・マンデビル病院で行われたアーチェリーの大会だと言われています。



年月を経て1960年からオリンピック開催都市で引き続き開催されるようになってから、認知度が高まりました。日本でも東京パラリンピックの開催決定を受けて、パラアスリートや障害者が障害者スポーツの体験型教室に積極的に出向く活動が続きました。初めて車いすに乗った健常者は不

自由さを感じつつも、スポーツ技術の向上や仲間との協力などスポーツの楽しみを改めて知ることが出来たはずです。不自由で面白くない、もしかしたら可哀想などと感じていた気持ちも払拭されたことと思います。

## スポーツから多様性を学ぶ

2013年7月7日、オリ・パラ開催が決まって、我々日本人に変化をもたらす大きなムーブメントが起きました。私は小学生の頃からサッカーやスキー、その他にも沢山のスポーツを経験してきました。競技レベルが上がれば上がるほど怪我は付きものです。前十字靭帯断裂や半月板損傷、左肩亜脱臼などを経験しましたが、幸いなことにまだ年相応のスポーツは出来ます。30数年前から何度も経験した入院生活中、これからの自分のあり方や存在意義など、ベッドの上から外を眺め考えたものです。その中には、これまでのスポーツ仲間の中から自分を消し去りたいという、絶望に近い思考も頭をよぎっていました。

一方、私の「積極的な心」は、1989年～1990年、私がサッカーの勉強で当時の西ドイツに10ヶ月間留学していた時の記憶



を蘇らせていました。ある天気の良い夏でした。ドイツのケルン市のメインストリートで医療用ストレッチャーに寝たままの身体障害者の散歩に遭遇しました。「えー、こんな人目につくところに出てくるの？」と振り返ってしまったこと、同時に、道行くドイツ人は全く日常的な光景であるという様にすれ違っていることに驚かされました。またディセルドルフ空港で時間調整中、暇を持て余していた小さかった娘は、黒人の子ども達と遊び始めました。体の大きさも、皮膚の色も違います。勿論言葉は通じないのですが、楽しそうに遊ぶ姿に、自分が失ってしまった何かを見たような気がしました。

オリ・パラで多様性（ダイバーシティ）が謳われ、我々がまだまだ世界に遅れをとっていることを痛感させられるとともに、本当の意味での多様

性を理解する機会となりました。国籍・人種・年齢や体型など様々な違いを問わない、と言いつつも、実は表面や外見から分かることだけに留まっているのかもしれませんが。

日本では随分前から意識改革を求められたジェネレーションギャップは多様性理解の入口であったはずですが、オリンピック開催代表者、セレモニー責任者など日本の顔となるべき人によって、日本人の認識の低さを世界に知らしめる残念な事態になりました。このように可視化できないものに対する考え方、観点、経験、様々なスキル、さらに身体能力と言った内面的な多様性を感じ取ることが低い社会であることを再認識させられました。ですから、これから次世代のグローバルな視点を持つことを期待される小学校や中学校の児童生徒たちが、無観客応援により現地で観戦するチャンスを制限されたことは非常に残念なことでした。

## 報道された「言葉」から考える

大会後、様々な検証が行われていくでしょう。注目したいのは朝日新聞が東京オリンピックと東京パラリンピックの報道で使われた「言葉」の調査・分析結果を公表したことです。分析はヤフーニュースで配信された記事に限定し、東京オリンピック最中に配信され、かつ「パラリンピック」を含まないもの、パラ関係はパラリンピック期間中に配信されたパラリンピックを含む3万6千超の記事から抽出しまとめたものです。

この分析をもとに、障害者スポーツの現在とこれからを考えてみたいと思います。オリ・パラ報道で使用された言葉から、両方に最も使用された言葉は当然「五輪」と「パラリンピック」でした。

オリンピックの2位が「オリンピック」と3位が「試合」でした。パラリンピックでは2位が「車いす」、3位が「パラ」でした。ここまでは大会で常に使用される言葉として使われたので当然のことです。オリンピックでは4位に「試合」、5位に「日本」、6位に注目の高かった「サッカー」に続き「決勝」、「監督」となります。さらに「勝利」「対戦」「チーム」「準決勝」「決める」というように競技的内容の報道が多いること

分かりました。

対してパラリンピックでは4位の「大会」に続いて「障害」「国立競技場」「陸上」「委員」と大会施設、種目や役員をイメージし競技色が薄らいできます。またパラの13位にある「始める」が目を引きます。オリンピックは持って生まれた先天的な肉体と才能によって競技を続けますが、パラリンピアンは多くは、生まれながらの障害、不慮の事故あるいは加齢とともに悪化する障害などを乗り越え、工夫と努力によってパラアスリートになった、と言う文脈で「努力」「取り組み」が使用されていたようです。

このような傾向を奈良県立大の岡井崇之教授は多様な発信者の中に、特定の物語化の傾向があることを指摘しています。家族が登場し「進学」「就職」「結婚」というライフステージに関する記事、さらに性役割を描くと指摘される「出産」「子育て」「家事」などが含まれる記事が多いことに表れていると述べています。

詳しいデータを持ち合わせていませんが、パラリンピアンはスポーツ開始年齢が高く、さらに競技を続ける環境としては遙かに難しいことが容易に理解できるでしょう。その結果、オリンピックでは18位に「金メダル」が出てきますが、パラでは17位に「銅メダル」、18位に「個」、20位に「メダル」がランクインされ、パラの方がメダル報道に偏っていたと述べられています。オリンピックではたった一つの頂点を目指しますが、パラも頂点を目指すのは勿論ですが、メダルを狙い上位に食い込む事が評価の対象となったのではないかと推測されています。

この文脈に沿った報道が逆に一般競技スポーツのトップを目指すという本質から外れているという批判もあるようです。岡井教授は、健常者のスポーツと障害者のスポーツを同じとは見ていない社会の共通認識や文化的な理由が存在していると説明しています。私も運動能力に制約がある限り、確かに競技スポーツであっても健常者アスリートと同様に記録を求める報道は余りにも建前論に過ぎないという意見に賛同したいと考えています。

またジャーナリストの森田浩之氏は「笑顔」について、障害者もパラリンピックを通し「笑顔」になってもらいたいという、健常者の心理を分析

しています。さらに法政大学の山本浩教授の指摘は興味深いものがあります。「日本」「代表」という言葉がオリンピックに比べ少ないのは、パラリンピアンが障害者の代表であって日本全体の代表ではない、と見ている可能性を指摘している点です。

例えばパラリンピアンは100mや走り幅跳びの世界記録は健常者の記録に迫ってきたことからパラアスリートがオリンピックに参加できるか、という議論が白熱してきました。しかし、難しい点として装具をつけているか否か、という「公平」にプレーするという原理に縛られます。また多くの参加選手の中から選ばれたことに価値があるという点も考慮しなければならないでしょう。したがってパラリンピアンがオリンピックと同等の日本代表と見られるには、「公平」という壁をクリアし、競技スポーツのスタートラインに立つことを認める社会の熟成を待たなければならないのかもしれない。

オリンピックであってもパラリンピアンであっても、競技のスタート時期が異なっていようと、さらに何らかの障害があってもスポーツは差別をしません。スポーツを楽しみ、自己にチャレンジする権利は全ての人たちに与えられています。旧態依然の閉じた社会感があるとしたら、それはチャレンジすることや喜びを忘れた我々年配の者たちのせいかもしれません。社会を動かすのはこれからの人たちです。オリ・パラ開催を契機に、日本の社会が本当の意味で多様性を理解し、そしてパラスポーツが健常者スポーツと肩を並べるスポーツイベントや教育活動として発展することを期待せずにはられません。

## 参考

朝日新聞朝刊 OLYMPICS FOCUS

「五輪・パラ報道 言葉に透けるのは」

(2021年9月26日)

## 神経筋疾患の生徒の主体的な取組

～オリンピック・パラリンピック教育を通じて～

北海道手稲養護学校三角山分校 教諭 小野寺 織 絵

### I 研究の目的

本分校は、「独立行政法人国立病院機構 北海道医療センター」に入院する神経筋疾患や重症心身障がいなどの児童生徒を対象にした学校である。昨年度8月、併設する国立病院機構北海道八雲病院の機能移転にともなって札幌に移転し、「北海道手稲養護学校三角山分校」として新たにスタートした。校舎は北海道医療センターに隣接しており、特別教室などの学校施設・設備を市立札幌山の手支援学校と共有している。

令和3年度1月現在は、中学部3名、高等部7名の計10名の生徒が在籍している。そのうち9名が筋ジストロフィーである。



(写真：北海道手稲養護学校三角山分校の校舎)

コロナ禍においては、病弱特別支援学校ということもあり、活動の制限が更に厳しくなり、万全な感染予防策を取っている。校外学習や保護者を含めた外部からの来校は全て中止または延期となっている。そのため、体育の授業での学習成果を発表するスポーツフェスティバルも中止し、通常授業の体育の様子をZoomやYouTubeで配信したり、本分校のWebからの情報発信と合わせてコロナ禍における学校行事への参加方法の工夫と環境整備を整える必要があった。今後も先を見通すことが難しい状況にあるため、感染症対策と子どもの学びの保障など、課題解決に向けて病院と連携を図り

ながら、取り組む必要がある。

本分校は、児童生徒の障がいの程度や実態に応じて3つの類型を設定し、教育課程を定め学習を進めている。

| 普通学級           | 重複障がい学級          |               |
|----------------|------------------|---------------|
| A類型            | B類型              | C類型           |
| 準ずる教育を主とした教育課程 | 知的障がい教育を主とした教育課程 | 自立活動を主とした教育課程 |

近年は、生徒数の減少に伴い集団で学習する場を確保することが難しく、体育の授業では、中高のA類型、B類型の生徒が合同で学習を進めている。しかし、生徒の実態差が大きいと、様々な競技のルールや特性を理解して戦術に生かすことが難しい生徒もおり、限られた人数の中で対戦型の競技をする難しさが近年の課題となっている。そのため、生徒の実態に応じてルール等をマイナーチェンジしながら進める必要がある。

本研究は、東京オリンピック・パラリンピックを通じて、あらゆる競技に興味・関心の幅を広げ、様々なスポーツの楽しさや価値を深めることを目標に研究を進めた。

本分校の生徒は、病気の進行に伴って転学・進学をしていく場合が多い。運動機能の低下により、体育の授業に主体的に参加できず、スポーツへの喪失感を抱いてきた生徒も多い。また、興味・関心の幅が極端に狭く、病棟生活の余暇時間を、ゲームをして過ごしている生徒がほとんどである。これまでも、神経筋疾患や重度重複障がいの児童生徒一人一人が主体的に学習に参加し、自己肯定感を高めることができるよう、本分校独自のルールによるスティックスポーツやハロウィック水泳法など指導内容や教材の工夫を図り、体育の授業を実施してきた。

しかし、本分校独自のルールにも限界があり、中学校・高等学校における体育で学習すべき陸上競技や武道などの授業を実施することができなかつた。そのため、東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、今まで指導することができなかつた競技について学習することとした。

## II 研究の内容・方法

### 1 内容・方法

#### ① オリンピック・パラリンピックについて

##### ア 対象

高等部 A類型 3名 B類型 1名

中学部 A類型 2名 B類型 1名

##### イ 実施期間・内容

令和3年7月～8月 6時間

##### ウ 方法

| 題材名   | 時数 |
|---|----|
| オリンピック、パラリンピック<br>・歴史や由来を知ろう<br>・東京オリンピック・パラリンピックの競技内容や日程                               | 1  |
| 陸上競技<br>・陸上競技の競技を知ろう<br>・ハードルの実演や用具を見よう<br>・eスポーツで短距離走とハードル走を体験しよう                      | 1  |
| 水泳<br>・オリンピックの競技を知ろう<br>・パラリンピックの泳法を観よう   | 1  |
| 武道(柔道)<br>・視覚障害者柔道を知ろう<br>・教師の実演を観て技の名称を覚えよう<br>・eスポーツで柔道を体験しよう                         | 1  |
| その他のオリンピック競技<br>・教育実習生の話を聞こう(ボクシング)<br>・ボクシングのグラブを触ってみよう<br>・eスポーツでボクシング、ボルダリングを体験してみよう | 1  |
| ボッチャ<br>・ボッチャをやってみよう  | 1  |

1時間にオリンピック・パラリンピックの歴史や、東京オリンピック・パラリンピックで開催される競技をビデオなどの視覚教材を使って学習を進め、1時間目終了時にアンケートを実施した。

「東京オリンピックの以前に開催されたオリンピック・パラリンピックをテレビなどで観ること

があったか」の問いに対して、「ある」と答えた生徒は3名、「ない」と回答した生徒は5名であった。

「ない」と回答した生徒に「なぜ観なかったのか」と聞いたところ、5名全員が「興味がなかった」と回答している。しかし、授業を通してオリンピック・パラリンピックの歴史や競技種目を知ると、「東京オリンピックが楽しみです」「パラリンピックの方が種目数の多いことに驚いた」などの声があがった。また、「興味のある競技や応援したい競技はありますか」の問いに「テニス、射撃、トライアスロン、カヌー、BMX」などオリンピック種目であることに授業を通して初めて知り、興味が高まった様子だった。



(写真1：アンケートに答えている様子)

2時間目～5時間目での授業では、各競技の概要や実際の試合の様子をビデオで視聴したり、オリンピックとパラリンピックの競技方法やルールの違いを確認したりした。



(写真2：東京オリンピック・

パラリンピックについて聞いている様子)

また、陸上競技や柔道などの競技経験がある教師が生徒の前で実演したり、各競技で利用する用具を近隣の学校から借用することで、競技特性や臨場感を体感したりできるようにした。本単元で取り上げた競技は、生徒が実際に行うことが難しいため、SEGAから発売されている「東京2020オリンピック」のゲームによる、eスポーツ体験を通して各競技の魅力を疑似体験できる場を設定した。



(写真3：陸上競技をeスポーツで体験している様子)

## エ 成果

柔道の授業では、柔道着姿を初めて見た生徒が多かったり、背負い投げなどの投げ技を観たりすると歓声が上がったりした。教師が実演した技の掛け合いを目の当たりにしたことで、eスポーツの中でも「背負い投げをしてみたい」「柔道がこんなに技があるとは知らなかった」などの声上がり、eスポーツ上でもとても盛り上がった。また、「eスポーツでも実際にやっている気持ちになった」と話す生徒もいた。



(写真4：教師による柔道の実演の様子)



(写真5：eスポーツで柔道を行っている様子)

また、水泳について学習した時も様々な声が上がった。本分校では、自らの浮力を使って浮いたり、泳いだりする「ハロウィック水泳法」を用いて学習を進めてきた経験があり、「水中で浮くことができ

た」「自分の力だけで進むことができた」など達成感を得た生徒が多かった。

そのため、パラリンピック選手の泳法を見た時は、「障がいの特性によってスタート方法がそれぞれ違っていても良いことがわかった」や「障がいをもっていることは、関係なくみんなと違っててもルールを変えながら、やりやすいようにすれば、楽しめる競技がたくさんあることがわかった」などの声があがった。また、オリンピック選手の泳ぎの映像を見ると、「きれいでかっこ良くて憧れました」と話す生徒もいた。

本分校の生徒は、運動経験が少ないが、自分の体感したことを他者と比較したり、活動を振り返ったりすることで、自己肯定感をあげることができ、体験による経験の拡大の大切さを痛感した。

6時間目は、パラリンピックで行う種目を体験する場として、「ボッチャ」を設定した。本分校では固定式のランプがなかったため、本校である北海道手稲養護学校から借用した。生徒は一度体験してみると、「面白い」「もっとやってみよう」という声が多数上がった。年間指導計画には予定していなかったが、急遽授業として改めて実施することとし、②の研究として報告する。

単元の最後にアンケートを再実施した。「授業を通して、わかったことや感じたことがありますか」の問いに「様々な競技があることがわかった」や「パラリンピックでは、障がいの度合いによってクラス分けされているのが、オリンピックと違う面白さがある」、「授業で習った競技のルールや歴史などをもっと調べてテレビで観たいと思った」という記述もあった。

「オリンピック・パラリンピックに興味をもつことができましたか」の問いに8名全員「はい」と回答しており、東京オリンピック・パラリンピックで開催された様々な種目を観戦したという声が聞かれた。



(写真6：eスポーツを行っている様子)

## ② ボッチャについて

### ア 対象

高等部 A類型 3名 B類型 1名  
 中学部 A類型 2名 B類型 1名

### イ 実施期間・内容

令和3年10月～11月 8時間

| 授業内容   | 時数 |
|--|----|
| ・ボッチャについて<br>・ルールについて  | 1  |
| 【個人戦】<br>・東京パラリンピックの様子をビデオ観戦<br>・戦略について<br>・ランプを使ってジャックボールに近づける投球方法<br>・試合 | 4  |
| 【団体戦】<br>・東京パラリンピックの様子をビデオ観戦<br>・チームでの作戦会議<br>・試合                          | 2  |
| ・実技テスト   | 1  |

### ウ 方法

本分校で行っている様々な競技は、生徒の実態に応じてルールの変更をしたり、生徒に応じた教材を作成したりして学習を進めてきた。しかし、東京パラリンピックには筋ジストロフィーのクラスで、当事者である河本選手が大活躍したこともあり、正式なボッチャのルールに則り授業を進めることとした。また、8月に行った授業の際にとっても好評だったため、小野寺パラスポーツ振興会の助成金でランプを購入させていただいた。

学習経験があったことで、8名中5名の生徒が、東京パラリンピックのボッチャ中継に興味をもって観ている。また、「ボッチャの試合を観てどうだったか?」と聞くと、「一見簡単そうだけど難しいかもしれない」「日本チームが金メダルを取ってすごいと思った」「協力してやっていて、仲間がいるからこそ勝てるのかもしれない」などの返答があった。

単元の1時間目は、改めて東京パラリンピックの様子やボッチャのルールについてビデオ鑑賞をした。

2時間目以降は、ランプや自分に適したリリースャーを選択して教師が意図的に置いたジャックボ

ールに近づける練習を行った。練習の際にランプをどのような角度や長さでセッティングしたら、ボールがどのように転がるかを指導し、生徒一人一人に考え実践する時間を設けた。



(写真7：生徒が主体的に考えるために提示した教材)

また、アシスタント役の教師に自分の要望をより具体的に伝えることも指導の重点とした。



(写真8：アシスタント役の教員に要望を伝えている様子)

2時間目以降は、練習を行った後に個人戦、団体戦の試合を行った。団体戦では、チームごとに分かれて投球順番や作戦などチームごとに作戦会議をする時間を設けた。



左：園芸用の支柱に小型の木槌を結束バンドでつけたもの  
 中央：釣り竿の先端にボールを押し出せる大きさに切断した木材を取り付けたもの  
 右：釣り竿を生徒の持ちやすい長さに切断したものの

(写真9：生徒の実態に応じて作成したリリースャー)

## エ 成果

授業の始めに試合の様子を改めてビデオで鑑賞することで、選手の投球方法や道具の使用法などのイメージを膨らませて授業に繋げることができた。

様々な位置に意図的に置いたジャックボールの近くに投球する練習では、ランプの角度や高さが提示されているボードを手がかりに、それぞれの戦略をアシスタントの教師に伝え投球している姿が見られた。生徒一人一人が順番に投球するため時間は要したものの、友達の様子を参考にする姿も見られ、一人一人がじっくり考えられたことはとても良かった。また、アシスタントはランプの調整しか行わないため、生徒が自力で投球をしなければならないことを生徒に伝えた。結果として、ランプの使用やボールを離す位置、使用しやすいリリースの選択など、それぞれ自分のより良い方法を見出し、どのようにしたらジャックボールに近づけることができるのかを考え主体的に練習を行うことができた。



(写真 10：手でボールを投げる生徒)



(写真 11：ランプ上で手を離す位置を調整する生徒)



(写真 12：リリースでボールを押し出す生徒)



(写真 13, 14：ランプの高さによってリリースを変更する生徒)

本分校の生徒は、病気の進行に伴い車椅子の座り方の微調整や、痒いところを掻くなど日常的なことも他者の介助を必要とするようになる。そのため、本人にしかわからない違和感を、具体的に伝えるコミュニケーション力が重要である。

ボッチャの授業においても、ランプの微妙な高さや向き：角度を、より具体的に教師に伝えることができるよう重点的に指導を行った。最初は、自分と向かい合っているアシスタントとの左右がわからなくなったり、どのような表現で伝えたら良いのかわからなかったりする生徒が多かった。練習を繰り返すうちに、「ランプの先を地面より少し離してください」「2番目に長いトイをランプに取り付けてください」「僕からみて右に少しずらしてください」など具体的な言葉でアシスタントの教師に伝えることができる場面が増えた。

また、試合終了時に自分たちが投球したボールを見て、勝敗や得点について生徒に説明する場を設けた。ルールが深まり、次時の試合の戦略を考え意欲に繋げることができた。



(写真 15：得点を説明している様子)

本単元の最後にジャックボールにどれくらい近づけることができるかという実技テストを実施した。30cmごとに色分けしたビニールテープを3段階の評価基準にしたことで、生徒にも理解しやすい評価となった。

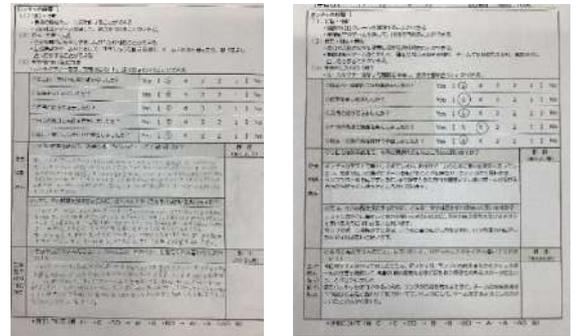


(写真 16：生徒が投球したボールを評価している様子)

本校の体育の授業は、毎時間の授業の終わりに「課題」「課題解決するための工夫や練習」「授業で学んだこと、分かったこと」を学習カードに記入している。回を増すごとにより記入方法がより具体的になり、空欄が埋まるほど記入できるようになった。学習カードの中には、「ランプでの投球だと手がひっかかるのでリリーサーを使う工夫をやる」「パラリンピックの映像を観て、ジャックボールを守るガードを作ることで相手に点を入れさせない工夫をしていたのでやってみたい」「ジャックボールを近づけるだけではなく、ジャックボールを動かして自分が有利になるような試合展開を考えていきたい」など、次時につながる具体的な課題解決を主体的に考えることができるようになった。

授業を終えて、生徒からは「自分で考えてランプ

の場所を伝えてボールを投球することが楽しかった」「戦略が思いついても思い通りにいかなくて難しかった」「いろいろな投球方法や作戦をやってみてうまくできる時がすごく楽しかった」などの感想も書かれていた。



(写真 17：高等部の生徒の学習カード)

### III 成果と課題

今年度は、東京オリンピック・パラリンピックを通じて、あらゆる競技に興味・関心の幅を広げ、様々なスポーツの楽しさや価値を深めることを目標に研究を進めた。身近な教材を通して、新しい競技に興味・関心をもって主体的に取り組めることができた。また、本校の生徒にとってのスポーツの経験の拡大は、「参加＝プレイする」だけではなく、参加の視点を変え「観る」「調べる」こともスポーツの楽しみ方の一つであることを改めて示すことができた。

一方、課題としては、生徒数の減少に伴って、集団競技の実施が難しくなっている。また、生徒の体力面・理解面での実態差が大きくなってきたため、教材教具を工夫しても、本校独自で行っていたルール変更も限界を向かえてきている。

1月より新競技として「車椅子ラグビー」を実施する予定であり、生徒が主体的に取り組めるよう教材教具の工夫やルール作りなど教員間で連携して準備を進めている。本校では、体育の授業は、集団の場を確保できる大切な役割になっているため、生徒一人一人が主体的で対話的な深い学びになり経験の拡大の場、自己肯定感を高められる場になるよう日々努力をしていきたいと考える。

公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会のご支援により教育活動を大変充実させていただき感謝申し上げます。今後も振興会のご支援のもと、病弱特別支援学校として様々な取組を考案・発信し、病弱教育の充実を図っていきたい。

# 生徒たちがサッカーを通して得られるものの考察

## ～本校サッカー部の現状から～

市立札幌みなみの杜高等支援学校 教諭 明杖 子竜

### I はじめに

本校サッカー部は、開設して5年目になる。1年生2名、2年生3名、3年生6名の計11名で構成されており、サッカー経験がある生徒が7名、未経験者が4名となっている。多くの生徒がサッカーに対する興味・関心が高く、意欲的に練習に臨む姿が見られる。練習がない日にも、近隣の公園で練習する生徒やプロの試合やトレーニング動画などを見て研究している生徒がいる。また、部活動以外にもクラブチームに所属している生徒もいる。

技術面においては、トラップやシュート、パスなど1つ1つの動作について基礎が身に付いていない生徒が多く、体力面においても練習中に自分のタイミングで休憩してしまう生徒もおり、課題がある生徒が多い。

精神面については、不安定な生徒が多く、調子が良い時と悪い時の差が激しく、それがチームの雰囲気にも大きく影響するため、課題となっている。また、試合に「勝つ」ことを目的とした生徒と友達づくりやストレス発散等「楽しむ」ことを目的とした生徒が共存しており、部活動に対して求めるものが違う生徒同士がトラブルに発展してしまうことも何度かあった。

そういった現状の中、本校サッカー部の顧問となり4年目となる筆者は、小学生～高校時代まで「勝つためのサッカー」をやってきた人間である。毎日、朝から晩までサッカーをしてきた身としては、特別支援学校の部活動といっても、どうしても「勝つこと」「うまくなる」ことに重点を置きがちになってしまう。

しかし、生徒の実態からもその視点だけではサッカーに魅力を感じ、入部してくれた生徒達の満足感が満たされていないことを感じているのと同時に、指導者として納得がいく練習が行えていないことがある。

そこで、本論文では、今までのサッカー部の活動をふりかえる中で、何を目的としてサッカーを行い、学ばせていくのか。また、当事者である生徒たちはサッカーに何を求めているのかを再検討し、今後の部活動の取り組みの方向性を検討していく。またその中で、私自身の指導についてもふりかえり、整理・再検討することで、本校サッカー部のさらなる部活動の充実へつなげていくことを目的としたい。

### II サッカー部の取り組み

#### 1 指導者の意識

部活動の指導を行う上で以下のことを意識しながら部活動の指導にあたっている。

(1) 生徒のしたい・やりたいから練習内容を構築する。

本校の取り組みのひとつ、ふりかえりから始まる「CAPD サイクル」を意識させ、生徒自身が考え、気付いたことを支える視点を持ち、生徒と関わる。そのため、日常から部員と会話をする中で、今考えていること・やってみたいことの聞き取りを行っている。

(2) コーチングの場面では積極的に褒める、認める。

生徒の実態から自己肯定感の低さ・自己理解の未熟さなどを踏まえ、それらを改善・克服し、生徒がさらなる「したい・やりたい」を求められるように支援する。そのため「それくらいはできて当たり前」「もっとこうしなさい」等の言葉かけは、行わない。

(3) 技術面の向上だけに成果を求めない。

障害による困難から、教えた技術がバランスよく段階的に向上することをこちらから一方的に期待してはいけないと考えている。「できていない部分（ウィークポイント）」にではなく、「できる部分（ストロングポイント）」に目を向けること。そして、挨拶や片付け等の規律面や仲間への声かけなど協調性等、様々な部分へも目を向け、多面的に生徒の実態を捉える中で、支援していくことを意識している。

#### 2 現在のトレーニング方法

##### (1) ウォーミングアップ

以前は、感情のコントロールの苦手さから、とにかくボールに触りたい。試合をしたい。シュートを打ちたいと考えている生徒が多く、意識が低い生徒が多かったが、現在は生徒たちが主となり積極的に取り組もうとしている。ブラジル体操→柔軟（体幹トレーニング含む）の流れで行う。ポイントとしては「気持ちの安定・切り替え」と「周りの人に合わせる（声・動き等）」ことである。

(写真1 ブラジル体操の様子)



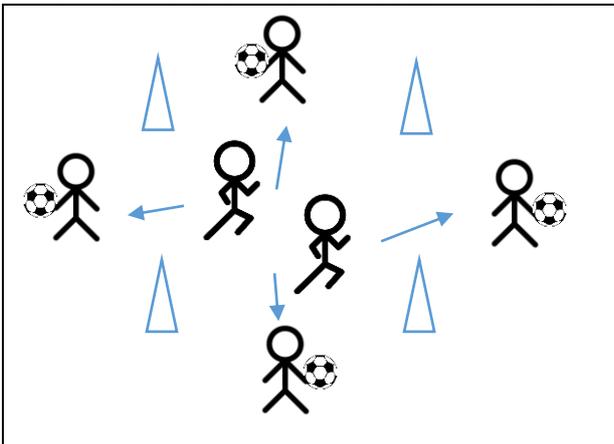
(写真2 体幹トレーニングの様子)



### (2) 基礎

初心者も多く在籍するため、基礎練習を積極的にメニューに入れている。ボックス内で実施。インサイド→インステップ→腿トラップ→胸トラップ→ヘディングの順番で行う。

パスを出す側は、実施者へのコーチングと相手の蹴りやすい位置へボールを手で投げることを意識させ、実施者側は、正確な位置でボールを捉えること、時間内でたくさん動くことを意識させる。すぐにできないと自信とやる気をなくしてしまう生徒が多い中で、正しいやり方を伝えた後に、このような反復練習をすることで上達していく生徒も多く、結果が出やすい練習でもある。

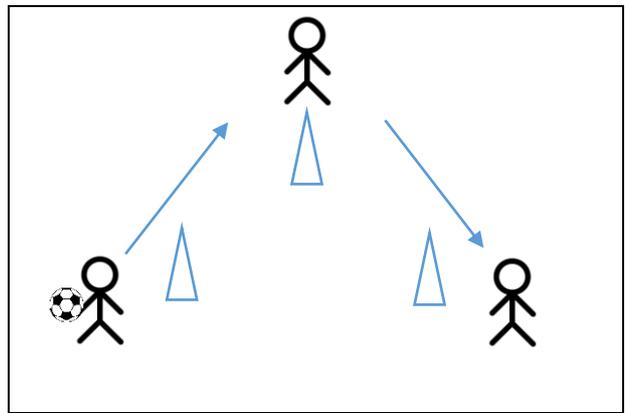


### (3) パス (トライアングル)

パスの強弱をつけることが難しく、パスミスにつながるケースが多い。また、相手を見ないでパスをする生徒やたくさんボールタッチしてからパスを出す生徒などが多い。

そこで「相手を意識する」「トラップする位置を考える」ことを特に意識させる。一連の流れとしては、ボールを見る→トラップ→相手を見る→ボールを見る→ボールを正確に蹴る(パス)という流れである。

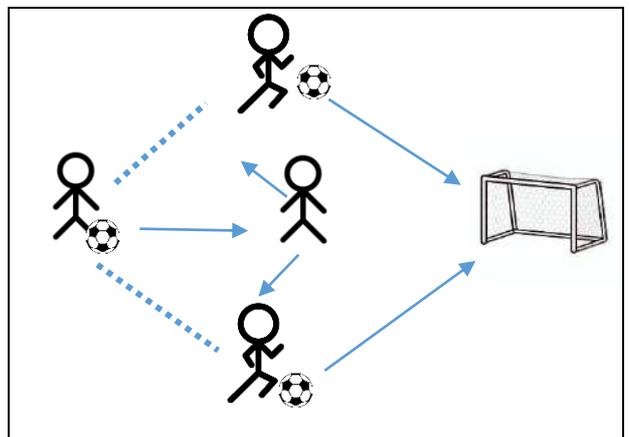
この練習を通して上記のポイントだけではなく「パスを呼ぶ声の大きさやタイミング」「パススピード」等といった点についても気づき、意識できている生徒も増えてきている。



### (4) シュート

ボールの中心をうまく蹴ることができない生徒が多い。そこで、「インステップキック」でのシュートにこだわらず、「トゥーキック」や「ルーブシュート」等キックの種類をいくつか伝え、各々が蹴りやすい方法を選択させている。

内容としては、パス→リターン→シュートというシンプルなもの。生徒の実態に合わせて、リターンを「浮き球」や「速いパス」等に行っている。ポイントとしては、「自分に合ったシュートを見つける」「トラップの場所を意識する」ことを重点的に伝えている。



(写真3 シュート練習の様子)



#### (5) ゲーム

その日の人数を見てゲームを行う。生徒が一番楽しみにしている練習である。

ポイントとしては「指導者から具体的な指示しない」という部分である。練習した成果を発揮できる場所として制限等は行わず、生徒たちで話合わせ、自分たちで考え、自分たちのやりたいように自由にプレーさせる。

#### (6) ふりかえりと気づき

##### ○プラスの気づき

- ・ドリブル、キックの強さなど、成果が出る生徒が多かった。
- ・以前より、練習内で怪我をする生徒が減った
- ・他者の反応を見て、合わせた行動がとれるようになってきている。

##### ○マイナスの気づき

- ・コロナ禍の影響もあり、基礎体力が低下していることから、練習メニューについていけない生徒がいた。
- ・気持ちが不安定（部活以外の理由）な時、チームメイトに対して厳しい言葉かけをしてしまう生徒がいた。
- ・経験者と初心者の差があるため、練習内容のレベルを調整する難しさが出た。

### Ⅲ さぐる

ふりかえりを踏まえ、本研究では具体的に、以下の2点について迫っていく。

#### (1) 生徒のニーズ・求めるものを把握する

これについては本校サッカー部生徒を対象とし、アンケート調査を用いて検証する。

#### (2) 生徒の実力差、能力差等、様々ある中で、どういったことを目的とすれば良いか整理したい。

これについては、本校の部活動運営規程を踏まえ、障害者スポーツ大会を主催している団体等の理念を参考に、サッカーを行う上での目的を明確にしていく。具体的な方法としては、関連資料を

もとに情報を整理し、必要事項についてまとめていく。

上記2点を踏まえ、サッカーを通して教えること、学ばせることを整理し、今後の方向性について整理していきたい。

## Ⅳ 研究1 (生徒が求めるものについて)

### 1 生徒へのアンケート調査

#### (1) 目的

部活動における現状・目的（ねらい）について、生徒が部活動に対して求めていること、困り感・疑問点を把握し、問題点を整理する。

#### (2) 研究方法（アンケート調査）

##### ①対象者

- ・本校サッカー部9名を対象に実施

##### ②内容

#### Q1 部活動は楽しいと感じますか

- ア とても楽しい 4
- イ 楽しい 4
- ウ あまり楽しくない 1

※多くの生徒が現在の活動にある程度満足し、楽しいと回答している。

#### Q2 何のために部活動をしていますか

(複数回答可)

- ・うまくなりたから 9
- ・楽しいから 5
- ・とにかくサッカーがしたい 4
- ・ストレス発散 3
- ・運動不足解消 2
- ・友達に誘われたから 2
- ・特にやることがないから 1

※サッカーの技術を向上させたいという目的だけではなく、ストレス発散や運動不足解消といったことをねらって部活動を行っている生徒がいることがわかる。

#### Q3 今の部活がなければ他の部活動に所属したか

- ア はい 3
- イ いいえ 4
- ウ 未回答 2

※サッカー以外の部活動に興味をもっている生徒が数名いることがわかる。

#### Q4 部活動に入って良かったと思うことは何か

(複数回答可)

- ・友達が増えた 3
- ・運動不足を解消できた 2
- ・サッカーがうまくなった 7
- ・いろんなことを忘れられる 3
- ・暇な時間をつぶせた 1

※部活動を通して、サッカーがうまくなったと実感している生徒が多いことがわかった。また、技術以外にも友達を作ることやいろいろな

ことを忘れることができるという良さがあることも実感していることがわかる。

**Q5 部活動の中で困ったことはあるか**

- ・女子が少ないので話す人が少ない
- ・練習中厳しい声をかけられた
- ・ついていけるかどうか不安
- ・コロナで練習時間が短い

※サッカー＝厳しい練習を行うというイメージが生徒の中にあり、その先入観に対する不安なイメージをもつ生徒がいることがわかった。

**Q6 練習を通してどんな力を付けたいか**  
(複数回答可)

- ・パス 9
- ・シュート 7
- ・トラップ 7
- ・ドリブル 7
- ・体力 7
- ・ルールを守る 4
- ・チームワーク 7
- ・あきらめない気持ち 6

※技術面の他に、チームワークやあきらめない気持ちといった就労へつながらる部分の力を身に付けたいと考えている生徒も多くいることがわかった。

**Q7 サッカー部でやってみたいことは**

- ・先生方と練習試合 6
- ・他校交流試合 2
- ・大会に出たい 1
- ・先生と二人で基礎 2
- ・ラダートレーニング 1

※今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、大会・交流試合などがなく、練習の成果を発揮できる場がなかったため、このような回答が多くなったと考えられる。

**Q8 卒業後もサッカーを続けたいか**  
はい 8 いいえ 0 未回答 1

※就職後もサッカーをしたいという生徒がほとんどであった。

(3) アンケート結果から見えること

Q2の結果からもわかるように、生徒達は部活動に対して、サッカーがうまくなりたいという技術的な向上を目的とするだけでなく、働く力を身に付けることを目的とした学校生活の中で、日頃の学習と関連づけ、ストレス発散の場としても活用していることがわかった。

このことから、生徒達が求めているのは、大会での優勝を目指した「勝つためのトレーニング」だけでなく、日々の学校生活を送る中で感じる「プレッシャーや不安といった部分を解消すること」についても求めており、生徒たちのニーズは

そういった部分にもあるのではないかと考えられる。

また、Q1・Q8の結果より、サッカーを楽しむことができていること、そして卒業後もサッカーに携わっていききたいという生徒が多くいることから、サッカーをすることを前向きに捉えている生徒が多いこともわかった。

## V 研究2 (部活を行う目的・ねらい)

### 1 本校 部活動運営規程

本校の部活動運営規程は以下の通りである。

- (1) 生徒の放課後活動の充実を図り、学校生活に対する意欲を高め生活の質を向上させるとともに、生涯にわたって充実した社会生活を過ごすための心身の育成を図る。
- (2) 活動を通して、部活や様々な人との人間関係を深め、感謝の気持ちを育てるとともに社会性を培う。

### 2 各大会の目的

本校サッカー部が今までに参加させていただいた大会を中心に、その目的・理念等を記載し、整理していく。

- (1) 第18回北海道チャレンジドサッカー大会  
(開催地：栗山)

サッカーを通して、自立と社会参加の可能性を高め、障害へのハンディを乗り越えた交流を深める。日々練習してきた成果を試すサッカー大会を開催する。北海道チャレンジドサッカー連盟を認知してもらい、障がい者スポーツ活動に対する社会一般の理解と認識を拡大していく。

- (2) 第11回北海道高等養護学校サッカー大会  
(開催地：新篠津)

競技を通して、体力と人格の向上を図る。サッカー競技の普及発展に努めるとともに道内高等養護学校同士の交流と親睦を深める。

- (3) 2019 第3回小野寺眞悟杯北海道  
特別支援学校フットサル大会

(開催地：札幌 セキスイハイムアリーナ)  
本大会は、北海道の特別支援学校生徒がフットサルを通して、日々鍛錬してきた成果を踏まえ、自校生徒間のチームワークを深め、かつ他校生徒に対しては敬意の念を持ってプレーし、社会性を養うとともに、意欲的に就労と社会参加への意欲を高めて、インクルーシブ社会の実現に向けた当事者として成長することを期待しています。

- (4) 第7回ウェルビーイングフットサル  
フェスティバル

(開催地：札幌 西区体育館)  
フットサルを通じ、地域社会でオープンな活動をすることを、生きがい・目標・人とのつながりの場とし、一人一人の自立と社会参加の可能性を高め、交流を深める。

また障がい者スポーツ活動に対する社会一般の理解と認識を拡大していく。

#### (5) 2020 第 19 回北海道チャレンジド

フットサル大会（開催地：札幌 つどーむ）

日々練習してきた成果を試すとともに、サッカーを通して、一人一人の自立と社会参加の可能性を高め、交流を深める。また、障がい者スポーツ活動に対する社会一般の理解と認識を拡大していく。

### 3 まとめ

各大会でのキーワードとしては「自立と社会参加」「交流・親睦」「障害理解を拡大」「体力・人格の向上」（各種大会共通）「社会性を養う」といった部分である。

以上のことを整理すると…

- ① 社会的な成長（自立・社会参加・交流）
- ② 精神的な成長（人格・社会性）
- ③ 身体的な成長（体力）

※「障害理解」は全てに関わる。

の3つにまとめることができる。

これらのことは、本校の部活動運営規程にもつながる部分であり、大会参加を通して部活動の充実を図ることができることがわかる。また、障害者スポーツは以前より社会的、精神的、身体的意義があることが示唆されている（Guttmann 1976=1983）が、まさに各種大会の目的・理念とその部分との重なりがあることがわかった。

## VI 全体のまとめ

### 1 考察

#### (1) 部活動を行う目的・ねらい

本校の部活動運営規定及び各種大会の目的からもわかるように、学校教育におけるねらいと重なる内容が多く、「自立した社会人」を育成するために必要な力を向上させることを目的としている。中でも特に「つながり」の部分が大きいと感じた。大会等を通じて、地域や他校との交流を行い、生徒たちにとっては、サッカーの技術だけではなく、「自己理解」や「他者理解」を深めることへつながり、交流相手にとっては、障害特性が目に見えにくい知的・発達障害のある方について知る・理解することへ発展していくことへの役割の重要性を再認識した。

そういったことを踏まえ、本校部活動の活動としても、校内における練習内容を工夫するだけではなく、校外における部活動を充実させていく視点を持ち、継続して地域・他校等と連携をしながら活動を進めていきたいと強く感じた。また同時に、そういったメリットや影響力について指導者が理解した上で、意図的に設定していくことが必要であることも感じた。私のような障害者スポーツの知識の経験がない指導者も少なくはないため、私自身としては、今回の研究で学んだこと・感じたことを共有・情報交換を図りながら、今後

も様々な活動に積極的に参加していきたいと考える。

#### (2) 生徒へのアンケート調査を通して

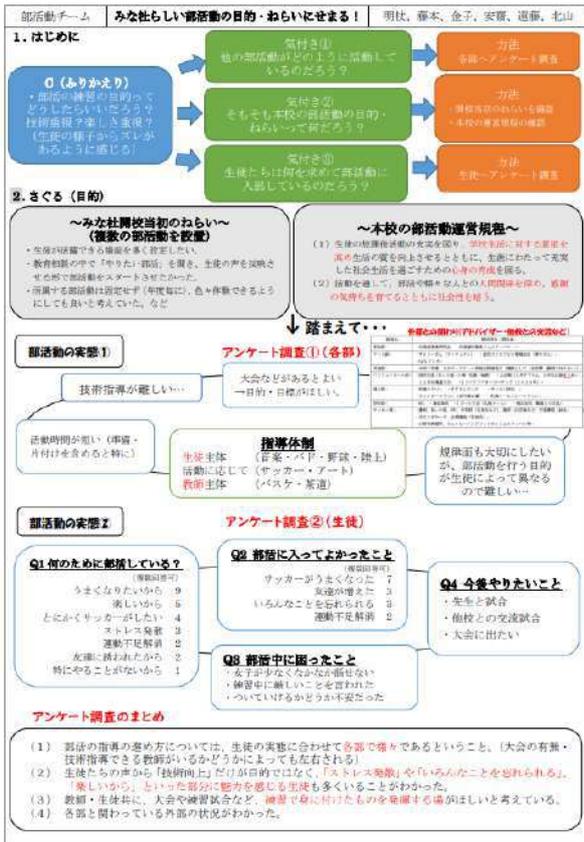
生徒たちは日頃様々な部分で人間関係をうまく形成できず、他者とのやりとりに消極的になってしまうことが多くある中で、サッカーの技術向上だけが目的ではなく、日頃の学習活動を充実させるために「楽しい」と感じるものや「ストレス発散」につながるような練習、仲間との連携が実感できるものを求めていることがわかった。

これについては、日々高校生として、就職を目指した授業をこなしていく中で、自分だけでは受け入れきれない「自己理解」「他者理解」を求められることが多く、自信をなくしてしまうことや気持ちが不安定になってしまうことがある。そういった現状の中で、自分を支えるものとして「サッカー」という存在を必要としているのではないかと感じた。放課後や休日の過ごし方についても、家で過ごし、何もやることがないという生徒の声も多く聞いている。学校として生徒達が活動できる場所を提供することは「気持ちを安定させること」や「自信をつけること」につながり、最終的には学習活動への充実、意欲向上に発展していくのではないかと考える。

練習内容としては、現在行っている基礎練習やパス練習等、結果が見えやすいメニューを通して、「うまくなった」と実感できている生徒も多くこのようなメニューについては継続的に取り組むことが効果的であると感じた。そのため引き続き、自己肯定感を高め、サッカーにおける「したい・やりたい」をより引き出していくことへつなげていけるように取り組んでいきたいと考える。

また、下記の文書は、本論文作成に向けて、校内研究において、ポスター発表を行ったときの資料である。内容は、上記の内容と同様であるが、参考までに掲載する。

(図4 校内研究におけるまとめ)



引用、参考文献等

- 1) 田引俊和 (2020) 日本の知的障害者スポーツとスペシャルオリンピックス
- 2) 岡田武史 (2019) 岡田メソッド
- 3) 第18回北海道チャレンジドサッカー大会開催要項
- 4) 第11回北海道高等養護学校サッカー大会開催要項
- 5) 2019年第3回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会開催要項
- 6) 第7回ウエルビーイングフットサルフェスティバル開催要項
- 7) 2020年第19回北海道チャレンジドフットサル大会開催要項

2 今後の方向性

今回の研究を通して、改めて練習内容や方法といった「手段」ではなく、サッカーを通して何を教えるか・学ばせるかといった「目的」が大切であると実感した。

指導者がどういう視点をもって関わるかによって、同じ練習内容を行ったとしても、生徒の反応や身に付く力は大きく異なると考えられる。例えば、パス・トラップ・シュート等、バランス良くうまくならなくても、得意な部分だけをさらに伸ばすことで、よりサッカーを好きになることや不登校などの理由から普段練習に参加できない生徒であっても、大会等、交流の場面の時だけ参加し、いろいろな人と一緒にサッカーをするだけでも、それは大きな意味をもつ。「苦手なプレーをたくさん練習しないと上手にならない」や「毎日部活に出ていないから試合に出さない」といった考えでは、生徒たちがサッカーを通して学ぶ目的とは、ズレが出てきてしまう。そして何より、サッカーを嫌いになってしまうことが懸念される。繰り返しになるが「目的」を踏まえた上での練習。そして関わりが重要であると考えられる。

最後に、今年度はコロナ禍で大会がすべて中止となり、生徒のモチベーションの低下を日々感じていた。特に2年生は1つも大会を経験していないため、ぜひ次年度は1つでも多くの大会が開催されることを期待し、そこから、より一層の部活動の充実を図りたいと考える。

## 第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会のオンライン開催に向けた取組

北海道真駒内養護学校 教頭 渡 邊 憲 幸  
(北海道肢体不自由・病弱教育校長会、副校長・教頭会)

### I はじめに

第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会(以下、肢養体とする)が8月31日に道内肢体不自由養護学校7校をオンラインで結び開催された。近年、遠隔地校は児童生徒数の減少や障がいの重度・重複化による長時間移動の負担、開催地への移動や参加への予算確保の課題があった。また、一昨年からの新型コロナウイルス感染症のリスクなどが大会開催の大きな課題となっていた。

平成29年度、北海道肢体不自由・病弱教育副校長・教頭会が中心となり、遠隔システムを活用した体育大会の実施に向けた協議を始め、令和元年度に一部遠隔地校と主会場校をオンラインで結び試験的に開催した。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の拡大の影響もあり、大会は中止となった。北海道肢体不自由・病弱教育副校長・教頭会は令和2年度に令和3年度の開催に向けた具体的な検討に着手するため、ワーキンググループの設置を行い、素案の検討を行った。令和3年2月の肢体不自由・病弱教育校長会、副校長・教頭会において大会の方向性を固め、令和3年4月からは開催校である手稲養護学校の実行委員会を中心に各校の代表者と具体的な運営に関わる協議を重ねてきた。

これまでの課題解決を目指した肢養体オンライン開催に向けた具体的な取組内容や手順等とともに、大会の内容・様子、各校からのアンケートに基づいて本取組の成果と課題について報告する。

### II 大会の目的

全道の肢体不自由・病弱特別支援学校の生徒の心身の健全な発育を図るため、体育的行事を通して各学校で学ぶ児童生徒の交流を深めることや、体力の保持増進を図ることを目的として、昭和61年度より「北海道肢体不自由養護学校体育大会」を北海道肢体不自由養護学校文化体育連盟の主管、北海道特別支援学校肢体不自由校長会の主催で開催されてきている。本年度の大会が第35回大会であった。

### III 大会に関わるこれまでの課題について

これまでの大会は真駒内養護学校、拓北養護学校、手稲養護学校、旭川養護学校の4校でメイン会場を輪番して各校が集まり大会を実施してきた。近年は遠隔地の学校については旅費の問題や児童生徒数の減少、児童生徒の障害の重度・重複化による移動等の負担から、参加を断念する学校も見

られ、新たな方策が必要となっていた。

平成29年度には株式会社沖ワークウェル様からの支援・協力もあり、真駒内養護学校をメイン会場として、網走養護学校と白糠養護学校を遠隔システムで結んでの大会が実施された。

そして、昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。

### IV 大会の課題及び検討事項について

昨年度、新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止となり、これまでの課題や検討事項に加え、感染症対策を講じながらの大会の検討も必要になってきた。オンラインによる大会開催に向けての課題及び検討事項として以下の10点があった。

- ① 参加校範囲
- ② 参加対象
- ③ 大会の競技種目内容
- ④ 細かなルールの決定
- ⑤ 大まかな流れ、シナリオの作成
- ⑥ 各会場のファシリテータ(進行役)の連携
- ⑦ 札幌市立肢体不自由・病弱教育特別支援学校とのオンラインでの接続、実施の検討
- ⑧ 結果の集約方法、提示方法  
(TV会議システムとZOOMとの併用)
- ⑨ 感染症対策を講じた実施方法
- ⑩ 教育課程への位置づけ

### V 具体的な協議の推進について

#### 1 ワーキンググループによる協議スケジュールの提案

以上の各検討課題を協議し、具体的に大会開催に向けて準備を行っていくために、肢体不自由・病弱教育副校長・教頭会によるワーキンググループの設置(表1)が令和2年8月に提案された。

表1 ワーキンググループの構成

#### 【大会の大枠に関わる協議】

- ・①-⑥⑩ ◎手稲養護学校、三角山分校、真駒内養護学校、拓北養護学校、旭川養護学校、岩見沢高等養護学校

#### 【札幌市立肢体不自由・病弱特別支援学校とのオンラインでの接続、参加に向けた協議】

- ・⑦ ◎豊成養護学校、北翔養護学校、私立札幌山の手支援学校

## 【結果の集約方法、提示方法、会場の感染症対策】

- ・⑧⑨ ◎函館養護学校、網走養護学校、白糠養護学校

各協議を行った際には記録化し、令和3年2月の肢体不自由・病弱教育校長会、副校長・教頭合同研までに協議の状況をまとめ、手稲養護学校が計画を立案しやすい状況をめざして取り組んだ。オンライン肢養体の開催までのスケジュールは図1のとおりである。

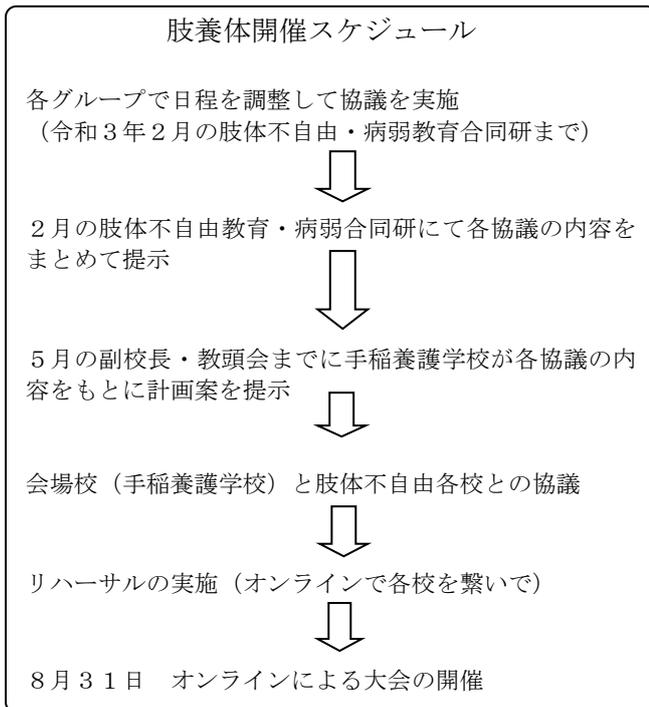


図1 肢養体開催スケジュール

## 2 肢体不自由・病弱合同研（2月）までの協議の実際について

ワーキンググループからの2つの案（①案：これまでの競技を踏襲したオンラインによる大会の実施、②案：新競技を取り入れ、学校間交流を盛り込んだ大会の実施）をもとに、肢体不自由・病弱教育校長会で協議が行われた。協議の結果、オンラインによる初の試みということもあり、①案のこれまでの競技を踏襲したオンラインによる大会を計画していく方向となった。

また、参加校はこれまでの手稲養護学校、真駒内養護学校、拓北養護学校、函館養護学校、旭川養護学校、網走養護学校、白糠養護学校の7校で実施することとなった。

2月の肢体不自由・病弱合同研では、主幹校となる手稲養護学校から①案の大会の概要とシナリオ案、また結果の集約方法と感染症対策に関する資料の提示があり、大会に関わる方向性（表2）を全体で確認することができた。

## 表2 大会に関わる方向性

- ※これまでの種目を踏襲したオンラインによる大会の実施。
- ※7校によるテレビ会議システム、ZOOM等を活用した実施。
- ※参加対象は従来通り、高等部生徒はオープン参加。
- ※記録の集約方法、感染症対策については各校で更に検討を重ねる。
- ※主幹校（手稲養護学校）主導、ファシリテーションによる大会運営（シナリオの再検討）。

## 3 会場校（手稲養護学校）と肢体不自由各校との協議の実際について

第1回実行委員会（6月9日）実施の前に主幹校である手稲養護学校より参加校7校に各校の担当者（大会実行委員）と大会事務局オンライン担当者の選出依頼があった。今回はオンライン上での連携や記録の集約が重要な業務と捉え、事務局内にオンライン担当者が設定されることとなった。

主幹校の手稲養護学校において修正、検討された開催素案をもとに各校に意見集約を行った。各校から検討事項として挙げたのは次の5点である。

- ① メダル数と賞状について  
従来の種目毎に1位から3位にメダル。6位まで賞状としたい。
- ② オンライン開催に伴う各競技のルール、「テニス ボール正確投げ」のルールと順位決定方法を確認。
- ③ 進行の細かな確認、大会運営の流れの確認。
- ④ オープン参加の種目数を増やすことについて。
- ⑤ 用具の確認について（函館養護、白糠養護、網走養護）。

### 1) 第1回実行委員会兼オンライン担当者会議（6月9日）の記録から

第1回実行委員会兼オンライン担当者会議（6月9日）では上記の①～⑤の事項を中心に活発な協議が行われた。

「①メダル数と賞状について」については、メダルは従来の種目毎に1位から3位に授与する。賞状は入賞として4位から6位まで授与する。それ以降の競技参加者には記録証とする。メダルと賞状は手稲から各校へ郵送することとなった。

「②オンライン開催に伴う各競技のルール、「テニスボール正確投げ」のルールと順位決定方法等」は図2のように整理された。

| 競技種目 | 競技種目                | 競技時間 | 出場選手    | 競技の回数   | オープン種目  |
|------|---------------------|------|---------|---------|---------|
| 1    | 車椅子30m折り返し走(男子)     | 15分  | 5名      | 3人1組 2回 | 2組以内で終了 |
| 2    | 車椅子30m折り返し走(女子)     |      | 5名      | 3人1組 2回 | 了できない人数 |
| 3    | 30m折り返し走(男子)        | 15分  | 5名      | 3人1組 2回 |         |
| 4    | 30m折り返し走(女子)        |      | 5名      | 3人1組 2回 |         |
| 5    | 申告レース(男女混合)         | 15分  | 男女混合で4名 | 2人1組 3回 |         |
| 6    | テニスボール正確投げ          | 20分  | 男女混合で4名 | 4回以内    | あり      |
| 7    | バレーボール正確転がし(スロープあり) | 25分  | 男女混合で3名 | 3回以内    | あり      |
| 8    | バレーボール正確転がし(スロープなし) | 25分  | 男女混合で3名 | 3回以内    | あり      |

(1) 競技への出場は1人2種目までとする。

(2) 車椅子30m折り返し走と30m折り返し走は各校で3コースを設営して実施する。競技回数はそれぞれ2回(最大6名参加)とする。オープン参加の人数は出場選手(小学部4年生以上、中学部3年生以下)の人数によって決定する。

(3) 申告レース(男女混合)は基本2人1組で3回実施するが、参加人数が少ない場合は時間内に終了できることを前提にして各校で調整する。今回の申告タイムは1分以内と電動車いす申告タイム35秒の設定で実施する。(別紙競技規則参照)

(4) テニスボール正確投げは、5投段階(ファーストステージ)での得点を各校で集計し、開催校に報告する。その段階で最高点が同数の場合は1投ずつ行い7校での1位、2位、3位等を決める順位決定戦(セカンドステージ)を実施する。以下4位から6位までの順位決定戦を行う。7位以下の選手は記録証とする。  
目的は1mか1.5mのどちらかを選手が選択する。

図2 競技種目及び内容と参加人数

「②進行の細かな確認、大会運営の流れの確認」では主に7校オンラインによる実施方法について協議が行われた。当初、肢体不自由各校に配備されたテレビ会議システムとZOOMアプリを併用した実施が提案されていたが、旧校務系ネットワークで動作への不安定さがみられるということで、ZOOMの2回線による方法で実施することとなった。また、記録の集約方法は、Google Workspace for Educationの「スプレッドシート」を活用してクラウド上で7校同時に記録を集約することが提案された。データ上は学校名とゼッケンで個人を識別することで、個人情報保護を確保して集約、シミュレーション実施日(オンライン接続方法確認日)に合わせて実際に行ってみることとなった。

「③オープン参加」については参加対象を小学部4年生以上、中学部3年生までの児童生徒を対象としているため、小学部3年生以下の児童、参加希望がある高等部の生徒はオープン参加として認めるが、各校での実施のため種目への参加人数を制限するという形になった(図2参照)。

「④用具の確認(函館養護、白糠養護、網走養護)」については、これまで肢養体は、真駒内養護学校、拓北養護学校、手稲養護学校、旭川養護学校の4校が持ち回りで会場校となっていたため、用具は揃っていた。白糠養護学校、網走養護学校については平成29年度の大会時に用具の製作を行い、オンラインで大会に参加している。今回、函館養護学校については部品、形状等、用具の写真等の資料を送付し、製作することで7校全てが大会に関わる用具を整えることができた。

表3 第1回実行委員会兼オンライン担当者会議(6月9日)の主な内容

- ※メダルは1位から3位に授与する。賞状は入賞として4位から6位まで授与する。それ以降の競技参加者には記録証とする。
- ※テニスボール正確投げ、バレーボール正確転がし(スロープあり)はオープン参加「なし」としていたが、競技回数内であれば参加できるように改訂する。  
テニスボール正確投げは、4回以内。バレーボール正確転がし(スロープあり)は3回以内。  
順位決定の方法について整理する。
- ※ZOOMアプリによるオンライン開催、Googleスプレッドシートを活用したクラウド上での7校同時記録の実施。
- ※オープン参加は出場選手の人数によって決定する。
- ※各校の用具状況が確認された。

## 2)第2回実行委員会兼オンライン担当者会議(7月1日)の記録から

- ①主幹校からの提案事項に関する協議の結果について
- ・「選手宣誓」については手稲養護学校の生徒が行うこととし、児童生徒の実態に応じて話ができなくても何らかのアクションで行うことも可とした。
  - ・「優勝校の復活」については行わない。
  - ・「準備体操」はコロナ対策を踏まえて、各校で競技開始前に行う。ラジオ体操、みんなの体操等、準備体操はそれぞれの学校で行うようにする。
  - ・「出場校、出場選手などの紹介」は今回実施しない。まずいろいろな要素を盛り込まず、これまでどおりの大会をオンラインで実施することに集約する。
  - ・「表彰場面の検討」については順位カードを使用して、1位、2位、3位を明確にする。インタビューは時間短縮のため行わない。
  - ・「開催要項の表紙」は児童生徒が描いた校章を表紙に使用する。
  - ・7月28日までに参加する児童生徒について手稲養護学校へデータを送付する。
- ②その他、検討事項の結果について
- ・「記録証の印刷」については各校で印刷する。印刷する用紙は手稲養護学校から各校に郵送する。
  - ・「準備と終了の合図ボード」については「Ready」「OK」ボードは○、「Finish」「終了」ボードは□で表示する。○は赤、□は青の2種類を各校で作成する。競技の確認、進行の確認で使用。シミュレーション実施日に実際に使って確認する。

- ・「審判長の説明」について、今回はオンライン開催なので開会式の項目としては残すが、時間短縮のため実施しない。
- ・「Zoom接続」のアカウントは2つから1つに変更する。接続は各校1台とする。画面を見る機会がなく、操作の負担が減るので1台でよい。
- ・「タイム計測について」は順位決定をスムーズに行うために、計測は100分の1秒までとする。  
(車椅子30m折り返し走(男女)、30m折り返し走(男女)、申告レース)

表4 第2回実行委員会兼オンライン担当者会議(7月1日)の主な内容

- ※選手宣誓は主幹校の生徒が担当する。
- ※準備体操は各校それぞれで事前実施する。
- ※表彰は順位カードを用意して視覚的に分かりやすくする。進行上の準備OKと終了の合図も色分けしたボードを作成する。
- ※操作の負担を減らすため、ZOOMによる接続は、各校1台とする。
- ※タイム計測は100分の1秒までとする。

### 3) シミュレーションの実施と第3回実行委員会兼オンライン担当者会議(7月28日)の記録から

7月28日に実施された大会シミュレーションに向けて各校は①シミュレーション時のiPadの接続についての確認、②会場の設営、タイムテーブルの確認(別紙1)、必要物品(ボード、順位カード、各校のプラカード、記録提示用紙)を作成して臨んだ。

第3回実行委員会とリハーサルの結果について、最終的に記録集約方法はGoogle Workspaceのスプレッドシートを活用して行うこととなった。シートの改善点を修正し、8月16日までに各校でテスト入力を行い、不具合があれば手稲養護学校オンライン担当者に連絡をするということになった。また、手稲養護学校からの全体アナウンス(オンライン)は、児童生徒の呼名は行わず、学校名とゼッケンで行うこととした。スタートの合図は各校で行うため、それぞれ実態に応じて参加選手の名前を呼び、競技への集中を高めるなどして対応することとした。表4にシミュレーション後の第3回実行委員会兼オンライン担当者会議(7月28日)の主な確認内容を記載した。その後は、各校それぞれ確認内容の徹底を図り、本大会を目指すこととなった。

表5 第3回実行委員会兼オンライン担当者会議(7月1日)の主な確認内容

- ※選手への言葉かけや用具を示して注目させる支援は問題なし。直接身体に触れて支援すること

- はできないので、改めて対応にあたる教師は競技規則をもう一度参照して臨むようにする。
- ※オンラインでは聞き取りにくいことが多いので、挨拶やアナウンスは「ゆっくり、はっきり」話すこと。
- ※全体の進行を示す表示は手稲養護学校が行う。各校で実態に応じて児童生徒に必要な場合は作成する。
- ※記録提示用紙(テニスボール正確投げ、バレーボール正確転がし)を準備したが、各校でスプレッドシートを見ながら同点を確認できるので活用しない。
- ※順位決定戦が必要な場合は審判長(手稲養護学校)が指名する。1位~3位はメダルに制限があるので必ず決める。4位~6位で同点の場合は同順位として取り扱い順位決定戦は行わない。
- ※終了やOKのボードは画面に掲示し続ける。
- ※ZOOM配信など保護者対応は学校事情(地域の感染状況、個人情報保護)を各校で検討して対応する。

## VI 第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会(オンライン大会)の実際について

### 1 緊急事態宣言下での肢養体の開催

8月31日の大会当日、新型コロナウイルス感染症の拡大、27日からは緊急事態宣言が発令される状況となったが、大会は無事開催され、真駒内養護学校中学部からすべての種目に13名の生徒が出場した。

本校では今年度学年毎に分かれた活動を行っていたため、出場学年以外は教室で待機し、校内のZOOM配信をみながら、自分の出番を待ちながら友達の出援を行った。

本校の体育館には手稲養護学校から発信されるメインの映像とともに校内配信用の映像との2つのモニターが設置された。

開会式が始まると各校の様子が映し出され、お互いに手を振ったり、他校の様子を見たりすることができた(写真1参照)。



写真1 各校との開会式の様子

## 2 大会での生徒の様子について

各競技は各校それぞれの合図でスタートし、ゴールをするという競技形式で行われた。初めてのオンラインでの開催ではあったが、生徒は画面向こうの他校の仲間を意識し、負けないで頑張るといった気持ちを持って競技に参加することができた。実際に同じ場所で競技を行うことはできなかったが、オンラインであっても、意識して取り組めたことに体育大会の場を用意できたことの意味を感じた。



写真2 30M折返し走(男女混合)の様子

会場は今回、保護者の参観はなく、生徒のみでの実施であったが、生徒の大会での頑張った姿は、VTRで記録し、大会後にYouTubeチャンネルへ動画掲載し、保護者の方にも観ていただくことができた。

## 3 大会における工夫ある取組

新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、急速に進められたGIGAスクール構想が後押しとなり、平成29年度からの念願であった肢養体のオンライン開催が実現できたことは、北海道の特別支援教育にとって大変大きな取組であったと感じている。

まだ、全国的にも各学校をオンラインで体育大会を開催している事例は少ないのではないかと思います。今年度が始まってから、主幹校である手稲養護学校を中心に協議を重ね、オンラインに対応したタイムテーブルの詳細を整え、大会の競技記録に関わるGoogleスプレッドシートによる同時記録を導入したことは、今後、このような大会を実施しようとする団体等においては参考となる事例になるであろう。また、ファシリテーターとなった司会者や進行のための合図ボードなども、本取組を通じて、とても工夫ある取組であった。

次項の各校からの大会開催後の反省アンケートのまとめと併せて次年度の取組へ活かしていきたいと考える。

| 順位 | NO. | 選手名  | 学年 | タイム     | 学校名 |
|----|-----|------|----|---------|-----|
| 1  | 1   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |
| 2  | 2   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |
| 3  | 3   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |
| 4  | 4   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |
| 5  | 5   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |
| 6  | 6   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |
| 7  | 7   | 山本 大 | 1  | 00:28.0 | 手稲  |

写真3 Googleスプレッドシートによる7校同時記録



写真4 競技開始前、終了後の合図の工夫

## 4 反省アンケートの集約から意見、要望等をまとめ

### 1) 大会の目的、日時、オンライン開催について

- 次年度の日時と開催方法は、関係する校長会(大会役員)、副校長会・教頭会で協議して決定する。
- 学校同士をつないだとき、「児童生徒に何を見せるのか」、大会目的の「交流を深める」という点の共通理解、他校の様子を効果的に伝える方法をどのように取り組むのかを明確にすることが重要となる。次年度の開催方法が決定後に検討する。
- 画面の切り替え配信は、オンライン開催ならば活用を検討する。
- 令和4年度の事務局校は旭川養護学校となる。新年度になったら各校へ指示、連絡を早めにお願ひしていく。

### 2) 事務局の運営、事前連絡、オンライン会議、送付

文書、関係資料、当日の運営等について

- ・オンライン会議は次年度も継続する。
- ・オンライン開催の場合はリハーサルを実施するとともに会議や日程は今年度より早めに設定する。文書だけでは理解しにくいことが多かったため、全体で細かく検討する。
- ・4月に旭川養護学校から具体的な日程（推進計画）が提示されると計画的に進められる。細かな日程の調整は今年度同様、教頭間で行う。

### 3) 種目内容、参加対象、競技規則について

- ・現行種目でルール改正を行い、重度の生徒も参加できる配慮を検討する。
- ・ボッチャ、ハンドアーチェリーなどの新種目の追加を検討する。
- ・現行競技規則の課題や分かりづらい点を洗い出し、修正したり追加したりして改訂を行う。
- ・今回の大会は、「これまでの大会と同様の形で行う」と校長会、副校長・教頭会、前大会事務局校（真駒内）から呈示があった。オンラインで開催できたことは成果だが、「参加校が同日、同時刻に競技を行うことは必要ない」との指摘もあり、次年度オンライン開催の場合は開催方法の検討が必要となる。別紙「旭川案1」は開催方法がこれらと違っており、メリット、デメリットが記載されている。次年度の開催方法が決まってから、オンライン開催の場合は「旭川案1」をベースにして参加各校の意見をまとめ、大会役員（校長会）、副校長・教頭会で検討して行ってほしい。

### 4) 開閉会式、表彰

- ・表彰は順位と記録を発表し、入賞者が賞賛される場面を設定する。
- ・閉会式は児童生徒の疲労を考え、「無理のない範囲で参加する」と押さえてはどうか。

### 5) 今後の大会の方向性

- ・オンライン開催の継続を希望する学校が複数あった。
- ・オンライン開催を継続するならば、事務局校の輪番を7校で検討してはどうか。
- ・重度・重複障害の児童生徒が参加できる種目の追加、スイッチや補助具などを使用した参加方法の工夫を検討する。
- ・「大会を行う必要性」については各校で再度確認してはどうか。今回開催時に引き継いだ資料（令和3年2月）には下記のとおり大会開催の趣旨が述べられていた。参加する児童生徒にとって大会の意義や目的を再確認することは大切だと考える。

### (大会開催の趣旨)

昨年度の開催中止を経て、第35回大会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、選手やご家族、各肢体不自由校関係者等すべての方々の健康と安全を考慮して、オンラインによる実施とすることとなりました。

コロナ禍の困難な状況であっても中止という選択をするのではなく、できる方法を模索しての開催を検討いたしました。参加する児童生徒が同じ会場で競技を競ったり、ふれ合ったりすることはできませんが、オンラインによる創意工夫を凝らした実施を行うことで、本大会の目的を達成していきたいと考えます。

大会の目的「全道の肢体不自由養護学校児童生徒の心身の健全な育成を図るとともに、同じ障がいのある児童生徒の交流を深めることを目的とする」

### 6) その他

- ・校内で行った記録会（厳正に実施）の記録を本番に申告しても良いか検討する。
- ・競技中のミュート解除を事前に確認する。
- ・テレビ会議システムにおける新ネットワーク切替を各校一斉に実施する。管理職が設定日時を調整し、IPADDRESSの共有と試験運用を今年度中に行う。（オンライン会議で旭川養護から提案、7校で確認済み）
- ・交流場面の検討
- ・参加基準の確認  
選手選考基準（令和3年1月引き継ぎ資料より）
- ① 選考対象は小学部4年生から中学部3年生までの児童生徒とする。
- ② 大会参加は、学校代表となることを理解した本人の希望を尊重する。それによりがたい場合は、学級担任などの教育的見地から参加を判断する。

## VII 成果と課題

オンラインでの大会ではあったが、競技を通じて肢体不自由児童生徒が自分の力を発揮できる大会が成功できたことは大きな成果であった。また、長年の懸案事項であった大会実施における旅費等の経費面を克服できたこと、距離の制約を克服し、どの学校においても一定数の児童生徒が参加できたこと、自校で体調面に配慮しながら参加ができたことはオンラインの大きなメリットであったと考える。

その他、緊急事態宣言下においても、安全で安心した大会運営を行うことができ、感染リスク等の課題解決を図ることができた。しかし、まだ、カメラワークや機器操作において課題が散見され、児童生徒が見て分かりやすい方法の構築が必要である。更に、アンケートにもあるように、今後は重度・重複障がいの児童生徒へも対応できるよう

な新種目の検討も必要となってくるであろう。  
 これからも各校が協力しながら、創意工夫ある  
 取組を形作り、肢養体の更なる充実が図られてい  
 くことを期待したい。

第35回道肢体不自由養護  
 学校体育大会が8月下旬、  
 道内養護学校全7校をオン  
 ラインで結び開かれた。開  
 催地への移動や新型コロナウイルス  
 ウイルス感染のリスクなど  
 の課題解決とともに、児童  
 生徒が落ち着いて大会に臨  
 むる環境づくりにもつな  
 がった。

教育校長会が主催。 てプロジェクトチームを編  
 成。令和元年度は、一部遠  
 征数の減少や、障がいの重  
 隔地校と主会場となる学校  
 度重複化による長時間移動  
 をオンラインでつなぎ開催  
 の負担、参加への予算確保  
 した。2年度は新型コロナウイルス

### 道肢体不自由養護学校体育大会開く 移動感染リスク解消 全7校オンラインでつなぎ

など、様々な課題があっ  
 た。平成29年度、道特別支  
 援学校肢体不自由・病弱教  
 育副校長・教頭会が中心と  
 なり、遠隔システムを活用  
 した体育大会の実施に向け  
 護学校、白糠養護学校、真  
 駒内養護学校、拓北養護学  
 校、函館養護学校の全7校  
 がウェブ会議システムを用  
 いて出場。小学4年生から  
 中学3年生を対象に、車椅  
 子30分折り返し走、ボール  
 投げなどの競技に参加し  
 た。各種目の参加者名簿を  
 用意し、リアルタイムで記  
 録をクラウドに入力するこ  
 とで、全体の順位を確定さ  
 せた。

などと話していた。  
 大会事務局長を務める手  
 稲養護の小川忠徳教頭は  
 「オンライン開催によって  
 競技の面では成果が大き  
 かった」と大会を振  
 り返った。今後の課  
 題に、他校の児童生  
 徒との交流を挙げ、  
 「次年度以降の取組  
 でさらに充実させて  
 ほしい」と話してい  
 た。



30分折り返し走に  
 参加した児童の様  
 子

第35回肢養体タイムテーブル

8月5日版 Version 3

| 種目            | 時間            | 児童生徒及びスタッフ等の動き   | アナウンス内容  | Zoomの操作、スクリーンの画面分割   |
|---------------|---------------|--|--|--|
|               | 8:50<br>9:00～ | 会費準備は前日<br>児童生徒登校、健康観察、体調確認<br>選手、オンライン参加者は体育館に集合、オンライン接続確認  |  |  |
| 選手整列          | 9:15<br>9:18  | 放送係のアナウンスで各校選手、所定の場所に整列<br>選手整列完了  | <ul style="list-style-type: none"> <li>「開会式を行いますので、各校選手のみなさんは整列してください」準備ができましたら「Ready」or「OK」ボードを提示してください。〔手箱アナ〕</li> </ul>   | <p>7画面～各校の整列状況を画面で提示<br/>学校名のアラカートを選手代表が持つて整列<br/>※開会式画面を提示</p> <p>全ての学校が準備できたら7画面から1画面にする。</p>                          |
| 開会式<br>開式のことば | 9:20          | 開式のことば 手箱養護学校 小川教頭<br>(開会宣言の後にアナウンス)   | <ul style="list-style-type: none"> <li>「開式のことば」〔手箱アナ〕</li> <li>「ただいまから第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会(オンライン大会)の開会式を行います」(手箱：小川教頭)</li> </ul>  | <p>開会の言葉(手箱1画面)<br/>手箱以外はZoomをミュート、ビデオオフ</p>   |
| 大会長挨拶         | 9:21          | 大会長挨拶 真駒内養護学校 上林宏文 校長<br>「」  | <ul style="list-style-type: none"> <li>「大会長挨拶」〔手箱アナ〕</li> <li>「北海道特別支援学校肢体不自由教育校長会、会長 真駒内養護学校校長 上林宏文様、よろしくお聞きします」</li> </ul>   | <p>手箱アナウンス終了後、真駒内を1画面にする。<br/>真駒内養護の1画面になったら大会長挨拶開始<br/>真駒内以外はZoomをミュート、ビデオオフ</p>  |
| 選手宣誓          | 9:25          | 選手宣誓 手箱養護学校 中学1年 田中心優さん<br>「練習の成果を発揮するとともに、皆さんとオンラインで繋がり、楽しく競技することを誓います。令和3年8月31日、手箱養護学校中部1年、田中心優」 | <ul style="list-style-type: none"> <li>「ありがとうございます」〔手箱アナ〕</li> <li>「続いて選手宣誓を行います。手箱養護学校、田中心優さん。よろしくお聞きします」〔手箱アナ〕</li> <li>「ありがとうございます」〔手箱アナ〕</li> </ul>                              | <p>真駒内養護学校長挨拶終了後、真駒内養護のZoomをミュート、ビデオオフ。手箱はオンにする。<br/>手箱1画面でアナウンス。アナウンス後、選手宣誓。<br/>選手宣誓終了後、そのまま審判長挨拶。開会の言葉。<br/>手箱1画面</p> |
| 審判長説明         | 9:28          | 審判長説明 手箱養護学校 石塚明博  | <ul style="list-style-type: none"> <li>「続いて審判長より競技開始に当たって説明があります。手箱養護学校、石塚審判長、よろしくお聞きします」〔手箱アナ〕</li> </ul>   | <p>手箱1画面</p>   |
| 閉式のことば        | 9:30          | 閉式のことば 手箱養護学校 小川教頭   | <ul style="list-style-type: none"> <li>「開式のことば」〔手箱アナウンス〕</li> <li>「以上をもちまして第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会(オンライン大会)の開会式を終わります」(手箱：小川教頭)</li> <li>「手箱養護学校から連絡があります。そのままお聞きください」〔手箱アナ〕</li> </ul> | <p>画面に表示</p>   |
| 準備体操          | 9:30          | 手箱養護学校から連絡<br>「各校へ連絡します。それぞれの競技開始は手箱養護学校が合図を出します。準備ができたなら「Ready」or「OK」ボードを                         |  | <p>連絡を行っているときは手箱1画面</p>  |

別紙2) Gアカウントのグループ作成

【データ元】

Google Workspace for Education (旧 G suite)の道教委マニュアルが、令和3年3月12日付け教環第998号クラウドサービスに係るアカウント取扱要綱の一部改正及びクラウドサービスの利用に係るアカウントの取扱いについて(通知)に添付の「35\_共有ストレージの運用」にあります。見つけられない方は、グループウェアの“共有ファイル>北海道教育委員会から>08 ICT 教育推進課”からダウンロードできます。

【作業】

(1) 各学校の管理者 G アカウントによるログイン

ブラウザを起動し、次の URL を開き、「学校番号 t1@hokkaido-c.ed.jp」でログインします。



(2) グループ作成「shiyoutai\_学校名@hokkaido-c.ed.jp」



(3) 作成したグループにメンバーを追加



(4) 作成したグループからメンバーを削除



(※) 各学校の肢養体グループの職員 G アカウントで、共有ドライブ「肢養体全体共有」にアクセス

各学校のグループを報告した後日、共有ドライブにアクセスできることを確認してください。

※管理アカウントではありません。



北海道肢体不自由養護学校体育大会新種目提案に向けた取組について ②  
 ～特別支援学校間のハンドアーチェリーオンライン交流内容の検討と補助具の開発を通して～

北海道網走養護学校 教諭 古谷太一（中学部主事）  
 北海道真駒内養護学校 教諭 松橋圭子（中学部主事）  
 北海道拓北養護学校 教諭 村上 渉（中学部教務主任）  
 教頭 安達雅美

I はじめに

今年度も、引き続き新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、今後数年間に渡り、新型コロナウイルス感染症とともに生きていかなければいけない状況が予想される。教育活動においては、感染症対策を講じ、努めてリスクの低減を図りつつ、学校教育ならではの学びの保障が求められている。

さて、北海道肢体不自由養護学校体育大会（以下、肢養体）は、全道の肢体不自由特別支援学校児童生徒の心身の健全な発育を図り、体育的行事を通して、各学校で学ぶ児童生徒の交流を深めることや体力保持増進を目的とする。

北海道の肢体不自由特別支援学校は、広域に渡り10校が設置されている。そのため、本大会を集合形式で開催する際には、都市部から離れた学校に在籍する児童生徒にとっては、会場校までの移動は、心身に相当な負担がかかること、また学校としては、遠征に要する予算保証が必要になる。

そのため、徐々に全校が揃っての開催が困難になり、課題解決に向けた具体的な方策の検討が迫られていた。

そこで、障がいのある方が働く際に、遠隔システムを活用し在宅で働いている事例を知り、本大会でも試行したところ、参加校が増え、且つ生徒が意欲的に取り組む様子が見て取れた。この後、奇しくも新型コロナウイルス感染症が流行し、全国的に臨時休校が相次いだため、2023年度の実施を目指したGIGAスクール構想が前倒しされ、情報環境が急激に整備された。

今年度、第35回となる本大会は、GIGAスクール構想に向けて整備されたネットワークや機器を活用し全面オンライン形式で開催することができた。参加校の中には、4年ぶりに出場することが

できた学校もあった。

本大会は、今後も、オンライン方式を採用し開催予定だが、従来開催していたリレー種目など一部は実施できなかったため、種目の見直しが必要である。そこで、本研究の取り組みをまとめ、大会での新種目としての提案を目指す。

II 取り組みにあたって

1 ハンドアーチェリーについて

ハンドアーチェリーは、幅広い年齢層や障がいの有無によらず一緒に楽しむことができるスポーツである。アーチェリーという的を射るイメージがあるが、矢は、「ピン」と呼ばれ、先端に磁石がついており、的は、アーチェリー同様、同心円状に様に得点が設定されている。基本の飛ばし方は、ハンドと言う通り手で投てきする。また、誰もが参加できるようにと補助具として既にハサスという、投てき補助具が販売されている。

2 目的

成果は、2点あり、オンライン交流の計画で押さえるべき内容が明確になったこと、また補助具の開発を通して、生徒達にハンドアーチェリーへの興味・関心の幅が広がったことが挙げられた。

課題については、3点あり、①肢養体への新種目導入を目指し更なる改善と各校への普及活動を行っていくこと、次に②実施内容の意図を教師間で共通確認すること、最後に③交流場面での生徒同士のコミュニケーション内容を検討することが挙げられた。こうした成果と課題を踏まえ、今後、肢養体の正式種目にするべく、取り組みのねらいを以下の通りに焦点化した。

今年度は、新たに拓北養護学校が加わり3校での交流学習になる。生徒は、競技を通して相手校との繋がりに期待していることが明らかになり、

1つ目の柱として、交流学习を必須な取り組みと  
考えねらいや内容を検討する。

また、2つ目の柱として、競技ルールを検討す  
る。児童生徒の障がいの状況は、様々であり個別  
性に富むため、これまでの交流学习では、実態に  
応じて的に当たるような環境設定をしてきたが、  
統一をしたルールを検討する。

3つ目の柱は、補助具の開発である。支援を受  
けて活動する児童生徒の中には、既製品では十分  
に能力を発揮することが困難な者がいる。そこ  
で、個別性に富む子どもたちが使用でき、それぞ  
れが持てる力を十分に発揮できる様な、補助具の  
開発をめざす。

### Ⅲ 取組の実際

#### 1 交流学习について

今年度の参加校は、当初は、3校が一同に介し交  
流する計画だったが打合せを重ねるうち、生徒の体  
力や集中力を見合わせると、2校の交流が適切と考  
えた。そのため、1校あたり2回ずつの対戦とし、  
合計6回の交流学习を計画した。また、生徒が見通  
しを持てるようにするため、どの交流学习でも流れ  
が同じになるように、指導案を共通に用いて指導し  
た。

#### 2 ルールについて

各校の対象生徒は、肢体不自由のみ、あるいは  
知的障がいがある重複障害の生徒である。それぞ  
れの障がいの程度は、様々であり独歩や見守り歩  
行の生徒から、支援を受けて自走する生徒、全介  
助の生徒など多岐にわたる。併せて上肢の操作性  
も個別性が高くハンドアーチェリーのピンを自分  
で飛ばす生徒から、補助具で筋力を補い方向を定  
め飛ばす生徒までいる。また、飛ばすタイミング  
や的までの距離の決定は、自己決定レベルから支  
援を受けて決める生徒までと幅がある。

交流学习での活動は、レクリエーションの要素  
が強いため、的までの距離や高さなどは、一応の  
基準は設けるが、生徒の状況により変更しても良  
いとした。

#### 3 補助具の開発について

これまでの成果として、真駒内養護学校が開発  
した補助具を借り、同様の物を製作し試すことに

した。



図 1 補助具

### 4 各校のハンドアーチェリー交流学习

#### (1) 網走養護学校の取組

##### ① 生徒の状況等について

網走養護学校は、網走市呼人地区にある道東唯一  
の肢体不自由教育特別支援学校で、近くには天都山  
や網走湖などがあり、「明るく 元気に 呼人で学  
ぶ」を校訓に掲げ、自然豊かな呼人の地で児童生徒  
たちが日々勉強に励んでいる。

学校の特徴として、肢体不自由教育特別支援学校  
ではあるものの、地域の特性から在籍する児童生徒  
の約8割が、知的障がいまたは自閉症を有しており、  
多岐にわたる障がい種の児童生徒たちが共に学ぶ、  
総合特別支援学校のような機能を担うことも必要  
になっている。

対象となる中学部生徒は、男子10名、女子2名  
の合計12名であり、肢体不自由がある生徒が4名、  
知的障がいを併せ持つ生徒は8名である。

ハンドアーチェリーについては、投げ方や的まで  
の投てき距離、的の高さを工夫することで、補助具  
を使用しなくても自らの的に向かってピンを飛ばす  
ことができる。

それぞれハンドアーチェリーに対して得手不得  
手はあるが、より高い点数を目指し、繰り返し練習  
をしてきたことで、的までの投てき距離をさらに伸  
ばしたり、方法やルールを覚えたりし取り組むこと  
ができた。

##### ② 実施の内容・方法について

投げ方については、基本の投げ方だけではなく、  
手と反対の足を踏み込む野球の様な投球フォーム  
や車いすからアンダースローで飛ばすなど、生徒自  
身が投げやすい方法で取り組めるようにした。

また、基準とする的までの投てき距離は3mとし、的の高さについては、身長（車いすの生徒は座った状態での頭の位置）と同じ程度を基本としたが、的まで届かない場合があり、1m付近まで距離を短くしたり、高さも身長（車いすの生徒は座った状態での頭の位置）よりも低くしたりしても良いこととした。

また、オンライン化における工夫としては、生徒の名前や得点を相手校に伝え共有しながら競技を進めたいと考え、タブレット上で作成した生徒の顔写真と名前をテレビ画面に映したり、得点札を使い得点を相手に見せたりしながら取り組んだ。



図 2 飛ばし方 投球フォーム



図 3 飛ばし方 アンダースロー



図 4 飛ばし方 立位



図 5 飛ばし方 座位



図 6 得点札提示の様子

### ③ 取り組みの様子について

第1回目の交流では、約1時間の学習時間を設定し、①代表あいさつ、②競技、③結果発表、④質問タイムの流れにすることを確認した。②で、各自が競技する前には、カメラ前で自己紹介や一言アピールを行ったり、相手校の生徒と交互に競技に取り組むようにしたり、できるだけ生徒の集中力が続くように設定した。

交互に取り組むことで合間の時間が加わり、競技時間が大幅に延び、生徒が楽しみにしていた質問タイムを設けることができず、主な交流場面としては代表挨拶や競技前の自己紹介、アピールタイムのみになった。

生徒たちは、2年目の取り組みということもあり、自らカメラに向かい話をし始めたり、カメラやテレビに映った相手校の生徒に注目したりするなど、意欲的な様子が伺えた。

また、競技については交流ということで緊張し、いつもより力が入って点数が伸びなかった生徒や練習以上の得点を取ることができた生徒など様々であったが、それぞれが競技のルールや約束などを守り、自分で的に向かってピンを飛ばす様子が見られた。

生徒からの感想や意見として、多くは「楽しかつ

た。」「また、やりたい。」という前向きな感想や意見が見られたが、やはり質問タイムを楽しみにしていた生徒も多く、「質問したかった。」という声も上がっていた。

第1回目の交流後、次回に向けて学部の職員で反省を行った。意見として、待ち時間が長いことや質問タイムの確保があげられ、第2回目の交流に向けて改善策を考えた。



図 7 代表あいさつの様子

#### ④ まとめ

第2回目の交流に向けて、待ち時間を減らすことや質問タイムの確保を行うため、拓北養護学校の担当者との会議では、ハンドアーチェリー交流の時間を2時間続きで行ってはどうかという話が上がった。そのことを受け、網走養護学校では、2時間続きの入れ替え制にすることで、1時間で交流する人数が少なくなり、待ち時間が短くなることと人数が減るとことは競技時間も短くなると考えられ、質問タイムを確保できるのではないかという意見でまとまった。

また、競技のルールについても検討を行い、肢養体に向けての競技規則として方向性を出したが、今回は、競技性よりも交流を重視したい点と自分で投てきをする生徒の取り組み方を継続したい点から、生徒の競技に対する取り組み方は、的までの投てき距離を基本1.5m以上離れることのみの変更とした。

実際に改善をして取り組んだ2回目の交流では、交流する人数も減ったことで、待ち時間が短くなったり、質問タイムの時間を確保することができたりと1回目よりもスムーズに会も進み、やりとりをする機会を増やすことができた。交流後に行った生徒へのアンケートでも、楽しかったと回答した生徒が増えたり、記述でも「楽しかった」「また、交流し

たい」という感想が増えたりしていた。

学部の職員での反省にも、「待ち時間が短くなり、良かった」や「質問タイムもあり、前回よりも交流できたと感じる」といった意見があがっていた。



図 8 交流学习の様子①



図 9 交流学习の様子②

## (2) 真駒内養護学校の取組

### ① 生徒の状況等について

真駒内養護学校は、札幌市南区に所在する開校60周年を迎えた肢体不自由教育特別支援学校である。他校と同様に小学部と中学部、高等部を設置している。準ずる教育から自立活動を主とする教育課程を編成しており、加えて医療的ケア児も在籍するなど児童生徒の実態差の幅が広い特徴がある。

令和2年度は新型コロナウイルスの影響で、予定していた行事や特別活動が多く中止になった。対象である中学部1年生については、校外学習が中止になり、交流教育も例年の様な外部との接点が持ちにくい状況であった。そのため、交流学习が2年目の生徒にとっては、昨年度行った交流学习を覚えていて、他校の仲間との交流に意欲や関心を示していた。また初めての生徒は、ルールが分かりやすいため受け

入れが良く、今年度の交流学习に期待する様子が見られた。

## ② 実施内容・方法について

特に今年初めてハンドアーチェリーに取り組む1年生は、事前学習として教師は競技に向かう生徒の様子を観察した上で、補助具のより良い使い方などを模索した。

生徒は、事前学習として、拓北養護学校とハンドアーチェリーの対抗戦と交流を行うことを学び、相手校の生徒についてビデオレターを通して気持ちを高めつつ、体育の授業で練習を重ねた。また、事後学習として大会終了後に、手紙を送付するなど親しい関係性が構築できるように努めた。

当日は、初期段階では、互いに緊張していたものの、次第にオンラインの状況にも慣れ、ゲーム終了後にミニ交流会として、お互いに質問し合う場面では、一気に和やかな雰囲気になった。各校の反省では、直接交流の時間を長く取るため、競技方法や進行について再検討をした。

網走養護学校の生徒たちとの取り組みは、2年目でもあり挨拶を交わした後は、緊張することなく自分の力を発揮できていた。こうした様子から、交流時間も組み方を再検討し、試合をするグループと、交流会を行うグループを設定し、試合を行いながら、交流会を行うことも試行した。自分の順番が終わった後の待ち時間の解消にもなり、限られた時間の中でより交流を深めることができた。



図 10 飛ばし方 補助具使用例①



図 11 飛ばし方 補助具使用例②

## ③ まとめ

障がいがあり動きに制限がある生徒にとって、体育的行事やレクリエーションに興味があっても、思うように操作できない活動が多い中、補助具が使用可能なハンドアーチェリーは非常に魅力的で、いつも以上に集中し競技に取り組む様子が見られた。肢養体で行われている投てき競技では、教師の支援が過多になり、生徒自身が飛ばしていると感じることは難しかったが、ハンドアーチェリーでは、自分で操作していることを意識して積極的に参加し、次もやりたいと意欲を示していた。交流会をきっかけに、生徒がハンドアーチェリーをしたいと訴えることもあり、他教科の学習内容の中に、ハンドアーチェリーを新たに取り入れ活動をするようになった。

誰もが参加しやすいハンドアーチェリーを媒介として、他校の仲間と交流を深めることができた交流学习を今後もぜひ継続していくよう希望したい。



図 11 交流学习の様子①



図 12 交流学習の様子②

### (3) 拓北養護学校の取組

#### ① 生徒の状況等について

拓北養護学校は、札幌市北区に所在する開校 21 年目を迎える肢体不自由特別支援学校であり、他校と同様に小学部と中学部、高等部を設置している。準ずる教育から自立活動を主とする教育課程を編成し、医療的ケアを必要とする児童生徒は在籍数の 4 分の 1 を占める。

昨今の新型コロナウイルス感染症により、本校では、狭隘化の打開策として、分散登校とオンライン学習、オンデマンド配信を実施し学びを保障してきた。

本校では、これまでハンドアーチェリーという競技に触れたことがなく、競技に必要な用具もなかったため、真駒内養護学校から用具一式を借用し、まずはハンドアーチェリーという競技について知ることから始めた。生徒への指導は、事前学習として体験会を実施したり、事前に撮影したビデオを鑑賞して他校の生徒の様子を知ったりするなど、交流会への期待感が増す工夫を行った。教員への周知については、実際に教員自身が競技を試すなどして、アダプテッド・スポーツとしての理解を深めた。

アダプテッド・スポーツ「ハンドアーチェリー」を体験してみませんか

ハンドアーチェリーは、「どこでも!」「誰でも!」安全に楽しめるレクリエーションスポーツです。ボード(的)に射のついでないピンを当て、その合計得点を競います。ボードにピンが当たると音が出て点数が表示され、分かりやすく初めての方でも気軽に楽しめます。ピンの先が磁石になっており、児童から高齢者、障害者まで安全に安心して楽しめるよう配慮されています。

(東京都肢体不自由児者父母の会連合会HPRより)

(アダプテッド・スポーツとは)障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す言葉。本来は1人1人の発達状況や身体条件に適合させたスポーツという意味。

図 13 フライヤー

#### ② 実施内容・方法について

生徒は、初めて体験するハンドアーチェリーに興味を示しつつ、交流学习も楽しみにする様子が見られた。当日は、TV画面に映る相手校の生徒に注目して、声援を送るなど、距離は離れているが一体感が生まれ、同時中継の良さが感じられる雰囲気が出た。

事後にアンケートを実施したところ、またやりたい、楽しかったといった声が多く挙がった。事後学習で取り組んだ手紙のやり取りでは、交流をきっかけに、相手校の生徒の名前を覚え、その後もよく口にする様子が見られた。



図 14 交流学習の様子①



図 15 交流学習の様子②

#### ③ まとめ

生徒の感想や様子からハンドアーチェリーの勝敗を意識して盛り上がったり他校の生徒との交流を楽しんだりするなど当初の目的を達成することができた。

オンラインによる視覚化支援として、自校と他校が 1 画面で分割表示されないよう、大型TVを 2 台用意し、それぞれのTVに各学校が表示されるように単純簡素化したり、撮影構図(アングル)を全体が入るようにしたりすることで、生徒

が見やすいように配慮した。見やすさを重視し大型TVを2台にしたが、ハウリングや聞き取りにくさなどの課題が見られた。また、点数表示やテロップに変わる視覚化支援の配慮など、より分かりやすい環境設定に配慮する必要性を感じた。さらに、肢養体を視野に入れたルールの見直しや個別性と公平性の視点での競技内容の検討も必要である。



図 16 生徒向けアンケート

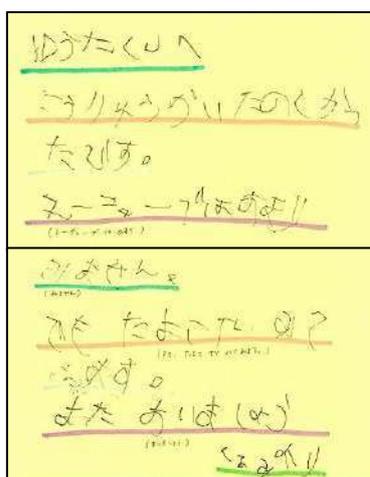


図 17 事後学習 仲間宛ての手紙

#### IV 考察

##### 1 交流学习の実施内容について

交流学习の流れについては、一定の流れにしたことで、生徒は、先を見通し主体的に取り組むことができた。また、参加生徒の出席確認を設定することで、相手校の顔や名前を覚えやすく、応援することができた。また、始球式やエキシビションを実施し、全員一斉の投球式やリレー形式での交流戦など、生徒がハンドアーチェリーをより楽しむことができるプログラムを考案し、先攻後攻決めに活用した。

また、生徒は試合後の他校の仲間との交流を楽しみにしており、試合時間などの兼ね合いを考慮しつつ、生徒同士の交流がより充実できる方法を、交流学习の度に検討を重ねていった。特に、交流の際の質問タイムなどを期待しているが、即時応答や表出が難しい生徒への配慮として、質問内容を事前に伝え合うことで、回答の内容や答え方の準備ができ、交流の場に主体的に参加することができた。

##### 2 オンライン化の環境設定について

同時双方向型オンライン交流では、機器トラブルの未然防止や円滑な進行のための環境設定が不可欠である。実施回数を重ねることで、生徒目線で改善点を修正し、生徒が主体的かつ持続的に参加可能なオンラインマニュアルを大きく3点に分けて整えることができた。

###### (1) 競技状況を画面上に可視化

進行表示的のように「現在の選手、投てき回数、得点」が分かるようにした。



図 18 タブレットを活用した表示例

###### (2) 分かりやすい、伝わりやすい教材の準備

タブレットで点数カードや名前の提示をすることで、相手校の状況が分かり名前を呼び熱心に応援する様子が見られた。

###### (3) 相手校への聞こえ方の配慮

進行役が話す声の大きさやトーン、情報量などに配慮することで、適切な実況中継ができ、進行内容の理解を促し、集中力も最後まで継続して保つことができた。

### 3 ルールについて

競技規則の4点（用具・距離/高さ・投てき・得点）において、個への配慮も考慮しつつ、ルールの見直しを図った。担当者間の会議では、基本的な距離を1.5m～3.0mとし、上限と下限を設定した。下限となる1.5mの距離からでも自力投てきでピンが的に届かない場合は、補助具を使用することとした。ただし、交流学習場面では、生徒の実態に応じては、自力投てきで的に当てることを重要視し、下限の1.5mより近付いての投てきも可とした。

また、的の高さは、地面からの的中心までを0.5m～1mとした。下限となる0.5mは、設置する台となるイーゼルの脚を一番短くした状態となる。さらに、必ず的にイーゼルの脚に立てた状態で競技をするようにした。

投てきについては、的に当たらなかった場合は、リトライできるようにし、機器のデジタル表示に従うこととした。当たって落ちた場合、表示がされた場合、表示通りとし、表示がなかった場合、リトライとしたが、時間を要し進行に支障が出たことがあり、回数制限は必要だと考える。

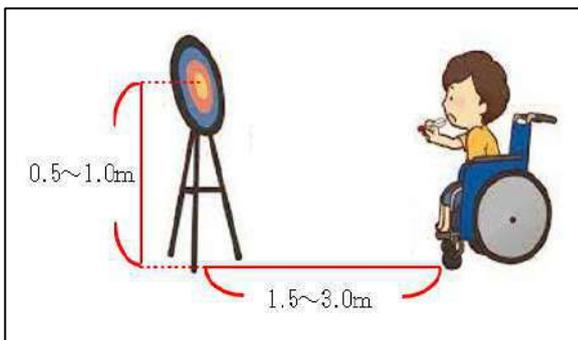


図 19 設定例

### 4 補助具について

用具については、現在は、共通した補助具を使用しており、課題点はあげられていない。現行の補助具の精度は高いが、生徒自身が飛ばすことの手応えを感じられる様に、今後も開発を続ける。

## V 成果と課題

### 1 成果

#### (1) 交流学習の実施内容について

実施後の生徒の感想では、次回に期待する声があげられ、質の高いコミュニケーション活動になったことが伺える。綿密な打ち合わせと振り返り

を通して、事前や事後学習、交流当日の学習内容のパターンができた。

#### (2) オンライン上の環境設定について

オンライン上でハンドアーチェリーを競技する上で、機器設定をお互いに共通理解のもと、会場配置やデジタル機器の環境を整えることで、生徒自身の「分かる」「できる」の実現に近付けることができた。

#### (3) ルールについて

ルールについては、個への配慮も含め、基本的な距離は3m、補助具を使用しない場合は1.5m、的の高さは、床からの的中心までを1mとし、投てき回数は、的に当たらなかった失敗投も含めて5回を上限とする。

#### (4) 補助具について

補助具については、2校が同じ物を使用しているため、このまま使用を継続する。

## 2 課題

#### (1) 普及活動の実施について

今後、北海道肢体不自由養護学校での正式種目にするため、計画的に未実施の学校（残り7校）での交流学習を設定するとともにハンドアーチェリーの器具の購入資金の確保について、協議・検討を進めていく必要がある。

#### (2) 参加枠の広がりについて

パラリンピックのように障がいの程度に応じたクラス分けを設定することで、参加の幅が広がり多くの生徒が選手候補になると考える。今後の参加方法について検討を重ねていきたい。

## VI 引用・参考文献等

- 1) 渡邊・古谷・山下（2020）北海道肢体不自由養護学校体育大会新種目提案に向けた取組について、公益財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会特別支援学校スポーツ研究成果報告書 No.4・28-35
- 2) ハンドアーチェリーハンドブック / 全国肢体不自由児者父母の会連合会

## 北海道紋別高等養護学校・ソフトボール部の指導実践

### ～各種トレーニング用具を用いた指導の工夫について～

北海道紋別高等養護学校（校長 奥田 雅紀）  
執筆者 教諭（ソフトボール部顧問）杉原 良太

#### I 今回の研究にあたって

##### 1. 学校の実態

本校は開校から 25 年目を迎えたオホーツク管内で唯一の公立特別支援学校(単置高等部)です。本校には職業学科と普通科が設置されており、今年度の総生徒数は 78 名です。本校に入学してくる生徒は知的障害があり、協調性運動障害や自閉症スペクトラム症候群などを併せ有する生徒もいます。紋別市は人口約 2 万 2 千人でオホーツク海に面しており、水産加工業が盛んです。現場実習では、水産加工業を中心とした企業とつながり、本校の教育活動に協力していただいています。教育職員（寄宿舍指導員含む）は 89 名で、うち 39 歳以下が約 80%、初任段階者職員が 65%と、非常に若い年齢層や経験年数の浅い職員で構成されています。

##### 2. 部活動についての実態

本校の部活動はバスケットボール部、フットサル部、新体操部、ソフトボール部、卓球部、陸上部、バドミントン部、美術部、パソコン部、文化読書部の 10 部があります。生徒は、基本的には部活動に入部することになっており、78 名中 72 名が加入しています。

その中で、我々ソフトボール部は今年度、3 年生 3 名、2 年生 1 名の 4 名で構成されています。基本的には、週 3 回（月・火・木）の放課後の約 50 分間の中で活動しています。

2019 年には、部としては初めて紋別市内の市民大会（タナカスポーツ杯）に招待枠として教員と生徒の合同チームで参加しました。

一昨年、昨年はコロナウイルス感染症の影響で、大会に出ることができておりません。今年度は、本振興会の研究助成費で各種道具を購入し、大会に出場することを目標にしていたので、残念な気持ちでいます。2019 年に初めて大会に出場

した生徒たちが卒業となってしまうので、10 月下旬に引退試合を実施しました。短時間ではありましたが、試合ができ、3 年生（2 名）は、担任との師弟対決があり、楽しそうにプレーしていたのが印象的でした。ただ 1 名が前提実習中であつたため、参加できませんでした。そのため、冬に体育館で引退試合を開催したいと考えております。

##### 3. 研究の目的

私はソフトボール部の主担当者となり、3 年目です。これまでの実践を統括する機会として、今回の研究に応募させていただきました。また、自分が学生時代にはなかった練習グッズや用具が今は豊富にあることを知り、その活用方法や効果について広く知ってもらえたらと考えた事も理由です。

#### II 研究の内容・方法

##### 1. 内容・方法

ソフトボールにおいては、「投げる」「捕る」「打つ」が特徴的な動作だと考えます。この動作には「空間認知能力」が大きく関わっており、特別支援学校の生徒のみならず、苦手だと感じる人も多いのではないかと思います。上記の 3 つの動作について、本部活動の 4 名の生徒をモデルとし、各種練習方法やグッズ・道具の紹介及び練習後の成果について考察します。

基本的な練習メニューとしては、①ランニング、②準備体操、③キャッチボール、④ノック（守備練習）、⑤バッティング（打撃練習）を曜日毎に行っています。

##### ①ランニング



## ②準備体操



※写真は素振りの様子です。

## ③キャッチボール



(1) フィールドフォース社製スローイングパートナー

このスローイングパートナーは、投球の際に肘が下がってしまい、コントロールや球速が出ない生徒Aに正しいフォームを意識付けさせるために使用しました。



## ④ノック (守備練習)



## ⑤バッティング練習 (打撃練習)

スローイングパートナーを使用した効果・結果については、投球動作の中で肘を上げて、肘から出してボールを投げる(離す)という一連の動作の意識付けにはつながったと考えています。しか

し、生徒Aにとってはスローイングパートナーを使用すること自体に違和感や抵抗感があり、継続的な取り組みは難しかったです。その中で、本人の意識や努力が大きいですが、定期的に言葉掛けを続けたことで、肘を上げてボールを投げる（離す）ことが若干ながらも改善され、キャッチボールの段階から強く遠くへ投げることができるようになってきました。

## (2) バッティング用シャトル



このバッティング用シャトルは、バドミントン用のシャトルに比べて、先端が重くなっており、スピードが出やすく、より投球に近いイメージでバッティングをすることができます。

他の部活動と場所を共有して活動するときは、ボールを使うよりも安全面にも配慮して行うことができます。



このバッティング用シャトルは、活動場所が限られる冬季の室内練習において重宝しました。一般的なバドミントン用のシャトルに比べて投げやすく、飛距離も出やすいので、バットの芯に当てて飛ばす感覚も得やすいと感じます。

使用した効果についてですが、ソフトボールよりの小さいので、ミートする力（確実に当てる力）につながっていると感じます。春先よりも秋以降の方がシャトルの飛距離が伸びていました。

## (3) アビリティロープ

このアビリティロープは、しなるロープを使うことで、理想的なスイングを体感するための道具です。





実際に使用してみると、鞭のようになり、スイング動作が強ければ強いほど、最終的に自分の身体に当たるように巻き付いて痛く、生徒があまり使いたがらないという結果になりました…。

写真も顧問一人の先生にモデルになってもらいました。

バッティングにおいて、「ヘッドを遅らせて振る」という感覚を伝えることが言葉や動作では伝えきれない現状がありました。しかし、このアビリティロープは安全面に配慮が必要なものの、使えばロープがしなり、「ヘッドを遅らせて振る」という感覚が分かりやすいのではないかと感じています。

#### (4) ポイント止めバッティング

このポイント止めバッティングは、ふだんのバッティング練習でミート（バットの芯でボールを捉えてある程度の良い打球を飛ばすこと）がうまくできないときに、私ともう一人、指導に中心的に入っている先生のひらめきから、「最初から自分の当てたいミートポイントに構えて、ボールを当てる練習＝ポイント止めバッティング」とし、試行的に行いました。スイングはせずに、ひらすら構えたポイントでボールをバットに当てるといった練習方法です。



この練習をしたことで、ミート率が格段に上がるという結果が出ました。それまでは「自分のポイントで打つんだよ」と感覚的に指導してきましたが、生徒にとっては分かりづらいものでした。この練習をしたことで、生徒も自分のポイントというのが掴めたのではないかと感じています。

#### (5) フィールドフォース社製トレーニングバット（穴バット）

このトレーニングバット（穴バット）は、先述の（4）ポイント止めバッティングを、器具を使い実際のスイング動作の中で、自分のポイントで当てる（穴を通す）というステップアップした形の練習方法になると思います。



↑素振り練習↓



実際に使ってみると、本校にあるボールでは円のフチに当たったときに、なかなかの早い打球になってしまって危険だということで、(2)のシャトル打ちと組み合わせて練習することにしました。(※商品の紹介を見ると、本来は小さくて柔らかいボールか軟式球で練習するように想定されているようです。)使ってみると、なかなか円の中にシャトルを入れるのは野球経験者(大人)でも難しいということが分かりました。しかし、10球に1度でも穴にシャトルが入ると、達成感があり、投げる人も打つ人も盛り上がる練習となりました。練習がマンネリ化しているときに、ゲーム

感覚で穴に入った数を競っても面白いのではないかと感じています。この練習の後にいつものシャトル打ちをすると、ミートする確率が向上したと感じます。

#### (6) 歩きながらの素振り

この練習は、比較的オーソドックスな練習方法かと思います。指導者側もスイングを見て、ついバットの出し方や軌道について指導してしまいがちではないかと思うのですが、そのスイング動作を支えるのは下半身だと思うので、下半身の動きが重要であると昔から言われているのはその通りだと私も思っています。しかし、下半身の動きを意識させるのはなかなか難しいです。そこで、歩きながら素振りをすることで動きの中で下半身を使ってスイングすることができるようになるのではないかと考え、練習に取り入れています。





この歩きながらの素振りでは、生徒たちがバッティングの動作で“体重移動をする”ということが言葉だけでは理解しにくかったので、歩きながらスイングをすることで、体重移動の仕方やバランスを体得するために行う練習法だと考えています。実際の打席では助走や歩きながら打つことは難しいですが、(ソフトボールの打撃テクニックとして走りながら打つスラップという打ち方がありますが、とても高度なテクニックです)特に下半身の使い方の感覚を得てほしくて行いました。この練習の後は、下半身が安定したスイング

ができるようになりました。

### (7) フリーバッティング

今まで紹介してきた打撃練習メニューの成果や新たな課題を洗い出すために、実践を想定したフリーバッティングを時折、行っています。夏季は実際のソフトボール球を使って打てますが、室内になると、ボールとバットが硬くて安全性が保てないので、柔らかいスポンジボールとティーボール用の比較的柔らかいバットを使用しています。

話が逸れますが、昨年の春先に体育館でバッティング練習をしていたら、生徒Bが汗で手からバットが滑り抜け、回転しながら飛んでいき、体育館の壁に刺さるといことがありました。もう少し上に飛んでいたら、窓ガラスも割れていたと思いますし、人に当たっていたらと考えると、ゾッとしました。幸いけが人が出なく、胸をなで下ろしました。バットを確認すると、バットのグリップテープが経年劣化でボロボロになっていたのので、急いでグリップテープを交換したのに加え、バッティング練習をするときには、バッティング用の手袋をしてなるべく滑らないようにしました。さらに、指導者側も連続のスイングで握力の低下や汗で滑る感覚はないか生徒と確認しながら、練習を進めることを徹底するようにして、再発防止に努めています。この時に改めて、道具のメンテナンスや指導者側が配慮すべきことの大切さを学びました。

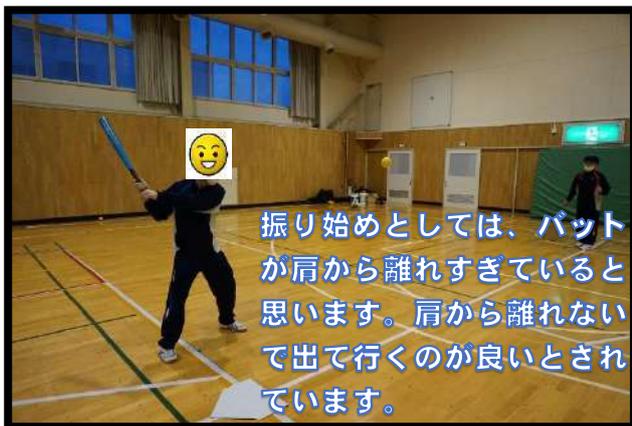




※外での引退試合

少し、実践や検証から話が逸れてしまうのですが、冒頭で触れました外での引退試合の様子を紹介させていただきます。

この日は、10月下旬で紋別の気温は夕方になると一ケタになることも珍しくありません。そのような良い環境とは言えない状況ではありましたが、集まってくれた職員と生徒で2チームに分かれ、3イニングという短い試合ではありましたが、笑いあり、真剣勝負ありの密度の濃い試合となりました。



※外での引退試合の様子

※1/16 交流大会

令和4年1月16日（日）は、今年度大会に出られなかった部活動のために、感染対策を行いながら、保護者との交流試合（大会）を企画しましたが、年末からのオミクロン株等の影響で延期せざるを得なくなりました。

様子等をお伝えしようと思っていたのですが、またしてもコロナの影響で残念です。一刻も早くこのコロナ禍が終息することを願うばかりです。

## その他 研究助成費で購入させていただいた道具

### ①キャッチャーミット（玉澤製）

大会出場を想定し、また、今年度の3年生（部長）の生徒はキャッチャーとして出場できる可能性がありましたので、購入させていただきました。残念ながら公式戦で使用ということにはなりませんでしたが、日々の練習の中で使えるようになってソフトボール部らしくなってきました。



### ②ファーストミット（玉澤製）

同じく大会出場のために揃えさせていただいたファーストミットです。部で一番体格が良くてファーストに向いていると思われる生徒に渡すと、慣れるまでに何日掛かるかと懸念がありましたが、初日から使いこなせていて驚いたのを覚えています。



### ③試合球、練習球（ソフトボール3号球）

元々、部として使っていたボールは、10～20年ほど前に購入されたものだと思われ、経年の汚れや痛みがある状態でした。大会に出るために

は未使用の新球が必要なのと、練習の段階から試合に近い形での練習をさせたいという思いがあり、検定落ち球（品質は公式球と変わらないが比較的安価）を購入させていただきました。いままで投げるときに滑らないか気にしながらでしたが、新しい球は使いやすいです。



### ④学校体育用ソフトボール3号球

室内で実際のソフトボールを使用して練習するのが難しいので、今まで柔らかいスポンジボール等で練習してきました。安全性は高いものの柔らか過ぎて取りにくかったり、軽過ぎて投げにくかったりという現状があり、外での実戦とはかけ離れたバウンドや練習になってしまうというデメリットがありました。そのような中で、探してみるとこれを見付けました。ゴムできており、重さも実際のものに近いので、キャッチボールやノックの練習に使って、外での練習や実戦に近付けることができたと思います。ただ、バッティングではジャストミートしてしまうと、窓や照明を破損してしまう可能性があると思われるため、使用できていません。おそらく本来は、外で初心者用に恐怖心緩和のため等で開発されたものです。



#### ④ボールケース（フィールドフォース社製）

新しいボールを購入させてもらったので、それを入れるケースも買わせていただきました。大手メーカーであれば、¥4000以上が相場ですが、こちらのメーカーでは、刺繍を入れることができ¥3300と大変、良心的な価格設定になっています。



#### ⑤ボール入れ（フィールドフォース社製）

こちらのボール入れは、練習球を入れて持ち運びするのに重宝しています。しかも、蓋にスポンジがついており、ティー（トス）バッティングをする際に投げ手が座っても痛くないという画期的な商品です。フィールドフォース社では、練習の時に「こんなのがあったらいいのにな」という声から商品化されているようなので、今後もあったら嬉しい商品が発売されると思います。



### Ⅲ 研究の考察

#### 1 成果

今回の研究においては、各種練習器具を使うことで、例年よりも生徒にとって、楽しみながら行えるメニューを提供することができたのではない

かと考えています。今までは指導者側の主観や感覚を中心に指導してきましたが、器具を使うことで「この生徒は、この動作自体が苦手なんだ」と気付くことができ、さらには、「違う方法、言葉掛けで指導してみよう」といった発見や視点の切り替えができました。

生徒の視点に立つと、突然ある日に顧問が見たことのない器具を持ってきて「使ってみて」と言うので、困惑させてしまった場面もあったように思います。器具の導入（購入）に当たっては、私以外の顧問の先生からも理解を得なければならぬという作業から始まりましたので、苦労しましたが、「何か生徒のためになるものはないかと探す」という作業自体を私が楽しんで行っていたように思います。

#### 2 課題

課題としては、まずは前述したトレーニングの結果や効果を数値化することです。具体的には、一つの例として（5）の穴バットを使用する前と後では、ミートする確率はどうなるのかをデータを取りまとめてみたいと思います。今回やれば良かったのですが、コロナ対策での部活動中止や行事前での部活動中止期間があり、計画的にデータを収集することができませんでした。

また、指導法（者）の課題として現在はインターネット等で様々な情報を得ることができます。その中には相反するような手法や指導法があるように思えます。例えば、私は学生時代には、「ボールは上から叩け、ダウンスイングが理想」と教え込まれてきました。しかし、現代では「フライボール革命という理論だったり、昔はダメだと言われていたアッパースイングのようなスイングが良い」とされていたりしています。細かくはアッパースイングとは違うのですが、私の理解や持論にはなかったものです。少年野球の世界でも、強豪と言われるチームは、その考え方や練習法を取り入れているように見えます。いずれにせよ、日頃感じるのは、どの情報を取捨選択していくのかということだったり、自分の理解は古いのかかもしれないという疑問を常に持ち続けられるかが課題ではないかと感じています。今の社会では10年も変われば、理解や常識も変わっていくと思います。自分の古い知識や理解を生徒に押し付けない

ように、常に指導者が知識や理解をアップデートできる状況にいななければならないなと感じています。

次の課題として、これが1番大きな課題かもしれません。1ページ目で触れたように今年度の所属生徒が4名で、内3名が3年生で卒業するため、現2年生1名のみとなり、部としての存続が危ぶまれています。今年度当初は何とか9人集めて、生徒だけでチームを組み、大会に出ることを目標としていましたが、部活動紹介や体験期間にできる限りの勧誘をしたつもりでしたが、現実には2020年度より1名減ってしまうという状態でした。ソフトボール部として存続していくために、今まで以上に魅力ある部にすることや情報発信の仕方を見直さなくてはならないと感じています。指導者がやりたくても、教える生徒がいないのでは何にもなりません。野球については、競技人口の減少でチームを維持していくことが困難となっています。ただ、昨年メジャーリーグで大活躍した大谷翔平選手の影響で、少年野球を始める子供が増えてきたという話も聞いたことがあります。女子野球の盛り上がりも感じますし、東京オリンピックで女子ソフトボールが金メダルを獲得したことは記憶に新しいと思います。競技人口を増やすには良い流れなのではないかと思っています。

特別支援学校のソフトボール部は、全道的に多くないのかもしれませんが、できる事であれば次年度も部として活動していき、情報発信をしていきたいと考えています。

最後に、今回このような機会をいただき、自分の指導法や理論を顧みることができ、一年間で確実に上達している、成長していると感じております。こうして考えたり、まとめたりしたことが、私にとって大きな学びとなりました。ありがとうございました。

## 引用、参考文献等

- 1) 「いばんやさしいソフトボール入門」  
著者／監修 木田京子 成美堂出版
- 2) 「ソフトボール超実践的練習ドリル」  
著者／編集 三科真澄 ベースボールマガジン社
- 3) 「考える力を身につけるソフトボール練習メニュー200」  
著者／編集 宇津木妙子／三科真澄

## 多様な障害に応じたスポーツ活動の工夫、開発

～教材・教具の工夫と、生徒の状態に応じた独自ルールの設定による実践～

北海道網走養護学校 教諭 大澤 祐司

### I 研究の目的

本校は、肢体不自由の児童生徒を対象とする特別支援学校であり、中学部には現在12名の生徒が在籍している（その他に訪問教育学級の生徒が1名在籍している）。本校の特徴として、肢体不自由のある生徒のみでなく、知的障害や発達障害のある生徒も多く在籍しており、12名のうち、身体障害のみの生徒は2名だけであり、10名は知的障害や自閉症、ADHDなどの障害を併せ有している。知的障害、発達障害の中でも重度から軽度まで幅広く、障害の重複と、それによる様々な状態の生徒が在籍しており、多様な支援が求められる。

スポーツを行うにあたっては、二分脊椎や筋ジストロフィーにより下肢を動かさず、また筋力の低下によって上肢の可動域や力の強さにハンディキャップがある生徒、知的障害や発達障害によりボディイメージに課題がある生徒など状態が様々であり、それに応じた、道具や補助具を使用した、転倒がないよう指導者が近くで支えるなどの支援を行ったりする必要がある。また、学部の生徒全員が同じ競技に取り組む際に、公平に競技を行うためには、教材教具の工夫、競技の選択、独自ルールの設定が必要となる。

そこで本研究では、多様な障害に応じたスポーツ活動の工夫や開発を目指し、教材教具の工夫と、生徒の状態に応じた独自ルールの設定を通して、多様な状態の生徒が楽しんで取り組むことができるスポーツ活動を行うことを目的とする。

### II 生徒の実態に応じたルールの設定

#### 1 競技の選択と概要

競技の選択では、保健体育科の球技の単元で授業を行うこと、また生徒全員で取り組むという点で、個人種目ではなく、団体種目を選択することを考慮して競技の選択を行った。

競技を検討する中で、前年度の授業などで多くの生徒が取り組んだことがあること、また、守備や走塁などの面で、車椅子の生徒が複数いる本校において、ルールを改善する必要があることから、「ティーボール」という競技を基に、学部の生徒全員が主体的に楽しんで取り組むことのできる競技を選び、独自ルールの設定を行うこととした。

ティーボールは、野球やソフトボールと似た球技でピッチャーを置かず、その代わりに本塁プレートの後方に置いたバッティングティーにボールを乗せ、そのボールを打者が打って試合が始まる。

基本的なルールとしては、野球やソフトボールに準じている。競技者は守備のポジションの数を考慮し、一般的な大会では10～15名となっているが、少人数で行う場合はその時に集まった人数、性差、年齢、グラウンド（体育館）の広さ、技術差、用具の質と数を考慮したルールの下でプレーすることが勧められている。

#### 2 ルールの選択と変更すべき点

##### (1) ゲームの進行方法

試合は、2チームが攻撃と守備に分かれ、攻撃側の全打者が打撃を完了した時点で攻守を交代し、規定の回数（イニング）を終えたとき得点の多いチームが勝者となる方法と、2チームが攻守に分かれ、第3アウトが成立することによって攻守を交代し、規定の回数（イニング）を終えたときに得点の多いチームが勝者となる方法がある。しかし、本学部の生徒が取り組む場合には、守備を行うことに難しさがある点、また生徒の打撃の機会を保障するという点から、本研究では前者のルールを基本として取り組むこととした。

## (2) 守備、走塁の削除

### a 課題①

本学部の生徒同士で試合を行う上で、一番の課題となる部分が守備、走塁の場面であると考えていた。本学部には現在2名の自走式車椅子を使用している生徒、1名の電動車椅子を使用している生徒、またダウン症で首に負荷がかかる行動を避ける必要がある生徒、脳炎による両下肢機能障害により、歩行が不安定である生徒など、激しい運動を行うことが難しかったり、他の生徒と接触すると危険であったりする生徒が多数在籍している。一方でADHDや自閉症などの発達障害はありつつも、基本的な運動機能に問題は少なく、走塁や守備を行うことができる生徒も在籍していることで、同じフィールドで複数の生徒が守備を行ったり、その中を、バッティングを行った生徒が走塁したりする行為は、非常に危険であることが予想された。

### b 課題②

前年度の授業でティーボールを行った際には、チームを2つに分け、守備を行う形で取り組んでいた。その時の様子として、飛んできたボールを追って拾い、送球するのは数人の決まった生徒であり、車椅子の生徒や、歩行等に困難がある生徒は守備を積極的に行うことが難しく、ボールに触れられる機会に大きな差があった。また、筋力の低下により上肢の可動域や力の強さにハンデがあることから、離れた場所に送球することが難しく、打球を捕球することができても、走塁している生徒よりも先にボールを返すことが難しいこともあった。これらの点から、ティーボールを行う上では走塁、守備の方法の改善、もしくはルール上の削除が必要であると感じていた。

### c 改善策

改善策としては以下の2点が挙げられた。

1つ目は、守備の方法を変更し、守備の生徒がボールを捕球または車椅子で触れた場合、走塁している生徒が、その時点で踏んでいるベースで止まるという方法である。この方法であれば車椅子の生徒の捕球が難しい点、また捕球した球をベースまで送球することが難しい点を解決できると考えた。その他にも、ベースを守る生徒を配置しな

くて良くなることにより、走塁する生徒と守備の生徒が接触する危険も減ることになる。

2つ目は守備を行わず、打撃のみで得点を競い合う競技性に変更するという方法である。この方法であれば守備の生徒同士、または走塁している生徒と守備の生徒が接触する危険がなくなり、安全にゲームを行うことができる。また移動方法の違いや身体機能上のハンデにより、守備を行うことが難しい生徒とその他の生徒の差がなくなり、取り組みやすい内容の競技になることが予想された。しかしこの方法で取り組む場合、守備を行わずにゲームを進めるためには、得点方法を変更する必要があった。

### d ルールの決定

改善策で挙げた2つの方法から、本研究で使用するルールを以下のように検討した。

1つ目の守備の方法を変更する案では、課題①で挙げられた守備の生徒同士が接触することによる怪我などの危険を改善することができないこと、また課題②の車椅子の生徒や歩行に困難がある生徒と、その他の生徒との間にボールに触れられる機会に大きな差がある点についても改善されないことが予想された。

2つ目の守備を行わずに打撃のみで得点を競い合う競技性に変更する方法であれば、課題で挙げられた問題点については全て解決することができた。また、練習の時間を打撃に重点を置いて指導することができたり、ベースボール型球技の複雑な守備の仕方や送球について、考えて取り組む必要がなくなったりするなど、生徒が取り組む内容がわかりやすくなり、親しみやすい競技性になることがわかった。そこで本研究では、2つ目の改善策で挙げた、守備を行わずに打撃のみで得点を競い合う競技性に変更するという方法で行うことを選択した。

## (3) 得点方法の変更

### a 基本的な得点方法

本来のティーボールの基本的な得点方法としては、打者がバッティングティーに乗せているボールを打って出塁し、その回の終了までに1～3塁のベースを経てホームベースを踏むことで得点が1加算される。打球をノーバウンドで守備の選手

に捕球される、ランナーが1塁のベースを踏む前にボールを持った守備の選手が1塁のベースを踏む、ベースを踏んでいない時にボールを持った選手にタッチされる等の方法でアウトになり、アウトになった場合はそれ以上進塁することができず、得点は加算されない。

#### b 得点方法変更の必要性

生徒の状態に応じたルールの変更として、守備・走塁を行わない形でゲームを行うこととしたことで、本来の得点方法でゲームを行うことが難しくなった。そのため、守備・走塁を行わずに取り組める得点方法を検討する必要がある。

#### c 得点方法の検討

得点方法の変更としては、以下の3点が挙げられた。

1つ目は、打った球の飛距離に応じて得点を配点する方法である。バッティングティーからの距離に応じてラインを引き、ラインを1本越えるごとに得点を1加算していくことで、打球に応じて得点を配点することができる。この場合、得点の判定をするのは打球の落下点ではなく、打球が止まった位置とすることで、バッティングで高く飛ばすことが難しい生徒でも得点を取ることができると考えた。

2つ目は、野球盤のように的を作成してフィールドに配置し、的を狙ってバッティングすることで的に当て、得点をとる方法である〔配置図1〕。的それぞれに得点を配点することで、当たった的に応じて得点をとることができ、高得点の的を狙ったり、的が多い場所を狙って確実に得点を取ったりするなど、個人やチームで作戦を立て、ゲーム性をもって行うことができると感じた。

3つ目は、フィールドに一定の範囲の枠を設置し、枠の中にボールが止まった時に、得点をとるという方法である〔配置図2〕。この方法でも、枠の大きさや形に応じて得点を配点することで、高得点の枠を狙ったり、大きい枠を狙って確実に得点を取ったりするなど、個人やチームで作戦を立て、ゲーム性をもって行うことができると考えた。また、枠を設置する位置をティーから見て手前側と奥側で分けたり、距離に応じて得点を配分したりするなどすることで、打球を遠くに飛ばす

ことが難しい生徒であっても公平に参加することができるのではないかと考えた。

#### d それぞれの得点方法の特徴

上記の得点方法を踏まえ、それぞれの方法の特徴について考察した。

##### ① 打球の飛距離に応じて得点を決める方法

1つ目の打球の飛距離に応じて得点を配点する方法では、打球が最長距離に達するとホームランという扱いになったり、強い打球を打つと距離が伸びやすく、高得点に繋がったりと、ティーボール本来のバッティングと共通した部分が多くあること。また、「強く打つ」ことのみにも焦点を絞って練習することができるため、打球の向きや角度などについて、難しく考えずにゲームを楽しめることなどが良い点としてあげられた。

課題は、障害によって筋力が低下していたり、筋力のバランスが偏っていたりする生徒、また身体の発達に遅れのある生徒などにとっては、打球を遠くに飛ばすことが難しく、生徒の障害や発達の状況によっては大きな差がある点である。

##### ② 的を狙って得点を獲得する方法

2つ目の的を狙ってバッティングする方法では、目標を狙ってバッティングすることでバットの持ち方や身体の向き、力の入れ方等を工夫する必要があり、打撃の場面で1つずつ打ち方について考えたり、指導者の助言や支援を受け入れたりして取り組むことができる。

良い点としては、的の配点や配置を適切に行うことで、高得点の的を狙ってバッティングをしたり、得点が低くても的が多い場所を狙って確実に得点を取りに行ったりするなどの作戦を一人一人の生徒やチームで立てることができ、現在のチームの得点や自分の技術などに合わせて自分なりに考えて取り組むことができる点が挙げられた。また的の配置によっては、障害によって筋力が低下していたり、筋力のバランスが偏っていたりする生徒、また身体の発達が遅れている生徒などでも他の生徒と公平に同じ条件でゲームに参加することができた。的については、それぞれの的に色をつけることで、文章や口頭の説明でルールを理解することが難しい生徒でも狙うべき場所がわかり、

取り組むことができた。

課題は、本来のティーボール（野球）の得点方法から大きく変化してしまい、野球を知っている生徒からすると、野球本来の楽しみや喜びが損なわれてしまう可能性があることも懸念された。得点についても、的を狙ってバッティングして当てるということは技術的に難しい面もあり、自分の打席の得点が0点になり、生徒が主体的に楽しむことができない可能性があるということである。

### ③ 枠の中に打球を止めて得点を獲得する方法

3つ目のフィールドに一定の範囲の枠を設置し、枠の中にボールが止まった時に、得点をとるという方法では、バッティングの際に身体の向きやティーとの距離、力の加減等を工夫したり、指導者の指導・支援を受け入れたりしながら取り組むことができる。

良い点としては、枠の大きさは自由に設定できるため、的よりも広く範囲をとることができ、得点を取りやすいことである。また、ティーから見て枠の出口側に多少の段差を設けることで、枠からぎりぎり出てしまうような強さの打球でも枠の中に収めることができる。生徒の力加減に応じて段差を調節して、難易度を調整することもできる。また、枠の内側にマットを敷くなどの方法で色を付け、資格支援を工夫することで狙うべき場所がわかり、取り組むことができる。また体育館の床よりも抵抗の高いマットを使用することで、枠内でボールが止まりやすくなり、より得点を狙いやすくなった。

課題は、2つ目の方法と同様にティーボール（野球）の得点方法から大きく変化してしまい、野球が好きな生徒にとっては、野球本来の楽しみや喜びが損なわれてしまう可能性があることが考えられた。また、枠の外側に段差を設けることによって、奥の枠を狙って打っても手前の枠の段差にぶつかり、打球が予期せぬ方向に跳ねてしまったり、打球の転がる距離が損なわれてしまったりして、狙ったとおりにいかないことも考えられた。確実に得点するために、枠の密集する場所を狙ったことでこのようなことが起こると、作戦を立てることが難しくなったり、思い通りにゲームを進めることができなかつたりすることがある。

### e 得点方法の決定

それぞれの得点方法の特徴を踏まえて、本研究で使用する得点方法について以下のように検討した。

①から③で述べたように、それぞれの方法に良い点と課題があることから、なるべく課題が少なく、対象の生徒全員が主体的に楽しめる形でゲームを進めることができることを優先して考えた。

①の得点方法では障害の特性上打球を遠くに飛ばすことが難しい生徒がいるため、このルールで取り組むことは本研究の目的である、『多様な生徒が楽しむことができるスポーツ活動を行うこと』から外れてしまうと判断した。

しかし、①から③の得点方法の中で、この方法が本来のティーボール（野球）に得点方法やバッティングの楽しみ方が一番近く、②と③の方法の課題として挙げられている『ティーボール（野球）の得点方法から大きく変化してしまい、野球が好きな生徒にとっては、野球本来の楽しみや喜びが損なわれてしまう可能性がある』という点を解消できる方法であるということから、飛距離に応じた得点を得られる形を残しつつ、他の方法でも得点を得ることができるようにした。

②の方法では、課題として挙げられていた『本来のティーボール（野球）の得点方法から大きく変化してしまい、野球が好きな生徒にとっては、野球本来の楽しみや喜びが損なわれてしまう可能性がある』という点を①の得点方法と合わせることで改善することができることがわかった。また、長打を打とうとして打球が低弾道になった場合、③の得点方法では強い打球が枠内に収まることは難しいのに比べ、②の得点方法では的に当たれば得点に繋がるため、①の得点方法と合わせることで得点を得ることができるため、①と②の得点方法で行った方が得点になりやすく、生徒がゲームを楽しめると考えたことから、得点方法は①と②の方法を合わせたものとするを選択した。

### (4) 得点方法に合わせたルールの設定

得点方法を①の打球の飛距離に応じた得点を決める方法と、②の的を狙って得点を獲得する方法を合わせて行うと決めたことから、ルールを再設定する必要があった。

#### a 得点方法

打球の飛距離に応じた得点はホームラン（今回はバッティングティーから見て一番遠い壁に打球が直接当たることとする。）でのみ採用し、ホームラン以外では基本的に的に当てての得点とすることとした。そうすることで野球が好きな生徒が、本研究の授業で野球としての楽しさを感じることができ、且つ他の生徒も公平に楽しめることができると考えた。

#### b 最低得点

得点について②の課題で挙がっていた、「得点について、的を狙ってバッティングして当てるとことは技術的に難しい面もあり、自分の打席の得点が0点になり、生徒が楽しめない可能性がある。」という点を改善するため、バッティングティーに載っているボールを打ち、前に飛ばす事ができた場合は1点を獲得できることとした。そうすることで自分の打席での得点が0となることなく、モチベーションを保って取り組むことができると考えた。

#### c 配点

得点の配点については、ホームランの得点をより高くしてしまうと、障害特性上ホームランを打つことが難しい生徒にとっては、今回のゲームにおいての最高得点を取ることが実質不可能に近くなってしまうこと、また的の得点をより高くした場合には、ホームランの価値が薄くなり、長打を打つことの魅力がなくなってしまうと考えたことから、ホームランの得点と的に当てたときの最高得点を同じく4点とした。

#### d 的の配置方法

的の配置については、青（2点）、黄色（3点）、赤（4点）の的を各2個ずつ配置することとした。また、バッティングティーからの距離を考える際には、対象の生徒の中で一番打球の飛距離を出すことが難しいと考えられる生徒に協力してもらい、生徒の打った球の最長距離までの中に2～4点の的が1つは必ず入るよう配置した。こうすることで全ての生徒に全打席で最高得点を狙える可能性があり、公平に行うことができると考えた。

#### e 1打席の打数

本研究では距離に応じた得点と、的に当てた得点の2通りの方法があるため、1打席における打数を2回とした。理由としては、対象の生徒の中にバッティングがとても上手な生徒がおり、バウンドしても良いという条件だと、かなりの確率でホームランを打つことができる。毎打席ホームランで4得点をとってしまうと、他の生徒が彼の得点に追いつくことが難しくなってしまうことや、安定して高得点がとれてしまうことで、ゲームの公平性をとることが難しくなると想定された。そのため1打席に2回バッティングを行うこととし、1回はホームランを打つことが可能、1回目にホームランを打った場合には、2回目は的に当てることでのみ得点を取ることが可能という形にすることで、ホームランを打つことができる生徒の楽しさや達成感を保障しつつ、高得点が確実に的当てにも取り組み、生徒によって打席での得点の偏りが大きくなるようにした。また、今回の単元では練習での指導を、的を狙ったバッティングに重点を置いて行ったため、本単元での練習の成果を発揮するという意味でも、1度の打席に1回は的に狙ったバッティングを行うようにした。

#### f 得点の判定

得点の判定については、生徒の意欲を引き出したり、自分の打席以外での活動を保障したりするため、教材の作成の部分で後述するが、的を、本体に打球が当たると的が動き、音が鳴る仕組みで作成することで生徒にも得点が入ったことがわかりやすくし、指導者の問いかけで生徒が得点の判定を行えるようにした。また、的の色による配点をテレビの画面に映し、常に生徒から見える場所に置いておくことで、当たった的から今の打席で何得点したのかを生徒たち自身が考えられるようにしてゲームを進めた。

### III 教材教具の工夫

#### 1 使用、作成する教材・教具の検討

生徒の実態に応じて独自ルールを設定したことで、工夫が必要となる教材教具や道具を検討した。今回の授業では得点方法の1つとしての的を使

うことから、まずは的を作ることにした。

## 2 的の作成

### a 的の形状の検討

的を作成する上で、いくつか条件を挙げて形状や仕組みを検討した。まず、生徒が打った球が的に当たったことがわかりやすい仕組みが必要であること。また、見てすぐに得点がわかるような的であることが必要だと考えた。また利便性の面で、的単体で自立すること、分解する等の方法で収納しやすい形状にすることが挙げられた。

### b 的の形状の選択、決定

まず生徒が打った球が当たったことがわかる仕組みとしては、的の動きと音で伝わるようにする方向で考えた。的の動きだけでは、生徒の打席や、待機している場所から見えにくい場所の的に当たったかどうか判断するのが難しいこと、音だけでは、その他の音があった場合に聞き取れない可能性があることから、的の動きと打球が当たった時の音両方で判断できるように考えた。

次に、それぞれの的の得点については、的に色をつけて判断することとした。的を得点毎に色分けすることで、瞬時に打球が当たった的の種類がわかると考えた。また、数字を理解することが難しい生徒がバッティングする時には、チームメイトや指導者が「赤を狙って。」と言葉掛けを行ったり、色つきのカードを見せて、「これと同じ色の的を狙ってみよう。」という支援や言葉掛けを行ったりすることで、目標が定めやすくなるのではないかと考えた。的には数字を記載するのではなく、色をつけて判断することとした。

的の利便性に関しても検討した。的に打球が当たることによって動く部分と、土台の部分の2つに分けることで、土台が安定して自立すること、また分解することができ、収納しやすい形状にすることができると考えた。また、それぞれのパーツの重さや形状に注意して作り、的の準備や片付けを生徒と一緒に進めることができるようにしたいと考え、的の制作を始めた。

### c 的本体の作成

まず始めに、的本体を作り始めた。的本体には

プラスチックダンボールを使用し、縦50cm、横90cmの大きさに切断した。また、土台と接続するために左右の上部に上下3つずつ穴を空け、丸棒を穴の間に置き、タイラップで固定した(図1)。丸棒をつけた反対の面に赤、黄、青の色画用紙を貼り付け(図3)、それぞれの色の的を2枚ずつ作成した。



図1

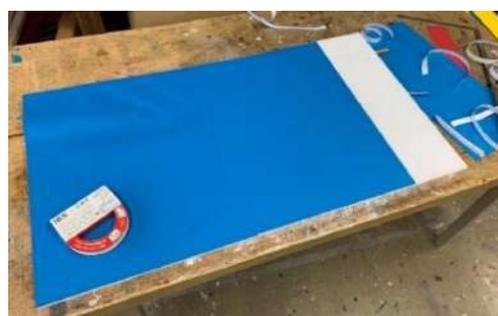


図2

### d 土台の作成

次に土台を作り始めた。的を自立させること、またある程度の速度で打球が当たっても壊れないよう、土台となる部分にはある程度の重さが必要になることから、今回は木材を使用することとした。左右からの的を挟む形で土台を配置することで、安定して自立するように考えて作成した。木材は2×4材を50cmと25cmにそれぞれ切断した(図3)。生徒が触れても怪我をしないようサンダーを使って研磨し(図4)、二つを組み合わせ固定した(図5、6)。



図3



図 4



図 5



図 6

#### e 的の完成

作成した的の本体と土台を組み合わせることで、ティーボール用の的が完成した。最後に的の裏側に鈴をつける（図 7）ことで、ボールが当たった際に鈴から音がなり、土台と連結している部分が支点となつて的の下部分が動くという的が完成した。実際にボールをぶつけてみると、それほど強い力でなくても、的の部分にあたると鈴の音が鳴り、的の下部分も動くので、打球が当たったかどうかの判断をしやすくなった。

以上の工程で、打球が的に当たったことがわかりやすい、当たった的の得点が見てわかる、分解

して収納することができるなど利便性があるという 3 つの条件を満たす的を作成することができた。



図 7

### 3 その他の道具や教材教具

#### a 道具の選択・調整

ティーボールの打撃においてプレイヤーが使用する基本的な道具としては、バットとバッティングティーがある。バットはティーボール用のバット 2 本（長くて細いもの、短くて太いもの）とプラスチック製のバット 1 本の計 3 本を用意した（図 8）。元々プラスチック製のバットについては、ティーボール用のバットが重く、筋ジストロフィーの生徒にとっては振るのが難しいことが考えられたため用意したものではあったが、全ての生徒に 3 本のバットの中から好きなバットを選んでバッティングすることができるように説明し、それぞれの生徒が自分で選んだり、指導者と相談したりしてバットを選択した。



図 8

バッティングティーについては、本校で所有しているものを 2 台使用した（図 9）。試合では 1 つのティーしか使用しないが、バッティング練習

の場面では2グループに分かれて活動するため、それぞれのティーの使用頻度が均等になるように、授業毎にバッティングティーを交換して練習を行った。



図9

## IV 授業実践

### 1 単元の構成

本単元は、体育科『球技』の単元として全6時間で取り組んだ。最初の1時間はオリエンテーション、2時間目から4時間目を、バッティングを中心に練習に取り組む授業とし、5時間目と6時間目を試合中心の授業とした。

### 2 授業の構成

#### a オリエンテーション

初回の授業では、「オリエンテーション」と「バッティングに挑戦しよう」として、オリエンテーションではティーボールについて、どんなスポーツであるのかクイズを交えながら説明をした。2・3年生は昨年度もティーボールを行ったことがあり、指導者からの問いかけに答えられることが多かった。1年生も野球を知っている生徒がいることから、興味をもって話を聞いたり、質問に答えたりすることができていた。ティーボールについて説明した後、今回の授業で行うルールについて説明を行った。得点の方法がホームランと的に打球を当てるという2通りある点について説明する際には、テレビで大谷翔平選手のホームランとイチロー選手のバットコントロールの動画を流し、それぞれのバッティングの違いを説明しながら、今回の授業でも、どちらの方法でも得点

を取ることができることを伝えた。

バッティングを行う時間には、2グループに分かれてティーバッティングを行った。初回は、生徒の実態把握を兼ねて、なるべく指導者が生徒のフォームや立ち位置について助言せず、自分でできる生徒は自分一人で取り組むようにして行った。また初回は、強くボールを打つことを重点に置き、的を使わず、壁に立てかけたエバーマットに向けて思い切りボールを打つよう伝えてバッティングを行った。

#### b バッティング中心の授業

2時間目から4時間目では、キャッチボールとティーバッティング、最後にミニゲームを行った。本単元では、守備を行わないため、キャッチボールが直接試合に関わることはないが、ボールを捕って投げる動きは全身を使う運動であり、身体のひねりやボールを追う動作など、他の競技に生かせる部分が多いことから、今回の授業で取り組んだ。ティーバッティングでは、今回からの的を置いてバッティング練習を行った。2時間目から4時間目のティーバッティングの練習では、指導者が生徒の立ち位置やフォーム、身体の向きなどを生徒に伝えながら、的を狙ったバッティングの練習に取り組んだ。特にティーの高さを打者のへその高さにすること、バットを構えて振った時のミートゾーンにボールが合うように立ち位置を調整すること、身体の向きを、狙っている的に対して垂直になるように調整することの3つに重点を置いて指導を行った。

的を狙ったバッティングの練習を行う中で、始めは的を狙うことに気持ちが向かず、力を入れてバッティングし、ホームラン性の打球を打っている生徒がいた。本人に聞いてみると、「的を狙うのはわかる。」「でもホームランが打ちたい。」と言っており、野球が好きで、ホームランを打つことが好きなこともわかっていたので、バッティング練習の2回目からはバッティングの練習を1人2周行うこととし、1周目の打席で希望者はホームランの練習を行うことができることとして、2周目は必ず的を狙うこととした。そうしたことで、生徒はホームランを1度は打てる環境が保障されたことがわかり、2周目の打席では的を狙ったバッティングの練習を行うことができた。

ミニゲームでは1人1打席ずつ回る形でゲームを行った。本研究の対象となる生徒は1クラス3名で4クラスに分かれているため、2時間目から4時間目でチーム分けを順番に回して取り組んだ。バッティング練習でもそうだが、ミニゲームでもほとんどの生徒が的を狙ってバッティングをしており、ホームランを狙ってバッティングをする生徒は1名のみだった。

バッティング練習の前には、ワンポイントアドバイスとして、1人の生徒が皆の前に出て、自分がバッティングをする際に気を付けているポイントの一つ友達に伝える場面を設定した。初回のみアドバイスの手本を指導者が見せることで、流れやアドバイスの仕方を伝え、2回目からは、前時の授業で上手にバッティングをすることができていた生徒を指名して取り組んだ。

ワンポイントアドバイスでは、指導者からの技術指導だけでなく、友達からのアドバイスを聞くことや、それに対して質問をすることで、生徒同士の対話の中から、より身近な人が気をつけて取り組んでいることがわかり、伝わりやすいと考えた。また、前に出て皆にアドバイスをしたいという生徒もおり、「先週の授業でがんばっていたから、今日は〇〇君。」と指導者が指名することで、アドバイスをする人になろうと、バッティング練習に意欲的に取り組む生徒が増えるのではないかと考え、取り入れた。

練習後にバッティングの振り返りを行った際には、ワンポイントアドバイスで出ていた内容に気を付けて練習に取り組んだという生徒もおり、アドバイスをする側も、聞く側も意欲的に取り組むことができるようになってきていた。

### c 試合中心の授業

5時間目、6時間目の授業ではバッティング練習、試合を中心に授業を行った。バッティング練習では、前時までと同様に、ワンポイントアドバイスを行い、バッティング練習に取り組んだ。練習では的を狙ったバッティングで、どの生徒も平均して2回に1回程度は打球が的に当たるようになってきた。また繰り返し取り組んだことで、打球が的の上を越えてしまわないように力を加減したり、的を狙ったバッティングに身体の向きが重要であることがわかり、自分で的に対して垂直に

なるように向きを調整してバッティングを行ったりする生徒が見られるなど、指導者の言葉掛けがなくても、自分で考えて取り組もうとする様子が見られた。

試合では、前時まで一人1打席2打で全員が1回ずつは打席が回る形で1イニングのみ行っていたところを、2イニング行えるように時間を設定した。生徒は前時までの試合よりも勝敗を意識するようになり、的に打球が当たることで喜んだり、ガッツポーズを取ったりするなど、試合を楽しんでいる様子が見られた。



## V 考察

### 1 研究の成果

今回教材教具の工夫と、生徒の状態に応じた独自ルールを設定を行い、ティーボールという競技を、肢体不自由特別支援学校に在籍する生徒でも、全員が楽しむことのできる授業を目指して研究を行った。本来のベースボール型の球技として、攻守があり得点を競う形とは異なる部分があり、本来のルールに慣れている生徒にとっては違和感を覚えることもあったと思うが、全ての生徒に得点のチャンスが公平にあることや、バッティングの方法や的の配置を生徒の状態に合わせて行うことができたことから、本研究対象の生徒全員が取り組みやすく、楽しめるルールでティーボールを行うことができた。

また、練習や試合の回数を重ねるごとに生徒のバッティング技術が向上し、打球が的に当たる回数が増え、自信をもつことができるようになったことから、生徒から「もっとやりたい」、「次は(的に)当てる。」など、意欲的で前向きな発言が増えていった。

## 2 今後の課題

今回は得点方法として「ホームラン」と「的に当てる」という2種類を用意したが、「ホームラン」の方法で得点しようとした生徒はバッティング練習でも試合でも1名しかいなかった。今後もこの2種類の得点方法で行う場合には、ホームランの難易度をもう少し下げ、「自分でもできそう。」と感じてもらい、挑戦する生徒が増えるよう調整することも必要と考えた。また、バッティング練習の段階でホームランの練習は希望者のみ行っており、希望者以外は的に狙ったバッティングの練習のみ行っていたため、ホームラン練習の希望者を増やせる工夫を行う必要があると感じている。

また、今回の授業では最後に、本校の近くにある公共のドームを利用し、ティーボール大会を開催しようと考えていたが、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言で、公共施設が休館になってしまい、実施することができなかった。テレビで見ているようなドーム球場や大きな体育館でスポーツに取り組むという、生徒にとってあまり経験したことのない体験をしてほしいと考えていたことから、今後は種目や周辺の公共施設の状況を見て、地域の資源を積極的に利用していきたいと考えている。

## 3 まとめ

今回の研究を経て、教材教具の工夫と、生徒の状態に応じた独自ルールの設定により、対象の生徒全員が楽しむことのできるスポーツ活動を行うことができるということを強く感じた。本校は肢体不自由のある児童生徒を対象とする特別支援学校であるが、知的障害や発達障害を併せ有する生徒が多く在籍している。生徒一人一人の障害や状態を考え、それに応じて競技のルールを独自に設定したり、ルールに合わせた教材教具を作成したりして、全員が楽しいと感じ、意欲的に取り組むことができる授業を今後作り上げていきたいと思う。

また、今回の研究で取り組んだ、教材教具の工夫や独自ルールの設定により、肢体不自由のある児童生徒や、知的障害や発達障害を併せ有する生徒でも取り組みやすくなった競技を通じて、他の特別支援学校とオンラインで交流を行ったり、地

域の小・中学校や福祉施設と交流を行ったりするなど、今後本校以外の学校や施設との交流場面でも積極的に活用していきたいと考えている。

## 参考文献

- [吉村 正, 1994] ティーボール入門  
NPO法人日本ティーボール協会

# 重度重複障がい児が取り組みやすいボッチャの充実を目指して

## ～ランプの使用を前提としたボールの選択と自作教材による実践報告～

北海道札幌養護学校共栄分校 教頭 越田 淳

### I 研究の目的

本校は、知的障がいを対象とする特別支援学校であり、小学部 10 名、中学部 4 名、高等部 5 名の 19 名が在籍している（その他に訪問教育学級の児童生徒が 4 名在籍している）。19 名のうち、知的障がい単独の児童は 1 名だけで、18 名は肢体不自由または病虚弱を併せ有している。そのうち 13 名の児童生徒がバギー等を使用しているなど、重度の身体障がいを合わせ有する重度重複障がい児が多いという実態がある。

ボッチャの活動にあたっては、麻痺等のために手指の動きに制約が大きい児童生徒が多く、ランプ等の使用を必要とする児童生徒が大半である。しかし、ランプは手投げに比べてボールの転がりに勢いがつきやすいために、「ねらったところよりも遙か先に転がる」「最初に的に寄せることが難しく、ゲームの後半に相手のボールを弾き飛ばすのに適している」など、手投げよりも扱いにくいという印象がある。

そこで本研究では、ランプを使用するのに適したボールの種類の検証と、独自ルールを設定した授業実践を通し、重度重複障がい児を対象とするボッチャの充実を目的とする。

### II 研究 I：ランプ使用に適したボールの検証

#### 1 研究助成によって購入するボールの選択

ボールの選択にあたっては、株式会社アポワテックから、一般社団法人日本ボッチャ協会推奨カタログを取り寄せた。

カタログからは、ボッチャのボールは大きく分けて、「レク用」、「国際規格適合品」、「国際規格適合品（ランプ用）」の 3 種類があることがわかった。レク用は一式 2 万 5000 円程度で購入しやすいが、国際規格適合品は 8～20 万円程度と幅が広い。ボールの硬さについては、レク用は 1 種類のみで特に記載がない。国際規格適合品については、「ミディアム」や「ソフト」の 1 種類のみ

の製品も多いが、柔らかい順に「ソフト」「ミディアムソフト」「ミディアム」「ミディアムハード」、「ハード」の 5 種類の異なる硬さのある製品もあった。（注 1：その他にも製品によっては、ハードがない 4 種類のもの、ミディアムハードがなくミディアムソフトがあるものなどがあつた）。

これらのボールの違いについて、株式会社アポワテックの担当者にお問い合わせると、以下の情報を得ることができた。

- ・レク用と国際規格適合品は、縫製の精度が異なり、国際規格適合品の方が真っ直ぐに転がりやすい。
  - ・VICTORY 社製のものについては、国際規格適合品と国際規格適合品（ランプ用）で皮を違うものにしてはいるが、それ以外の会社については同じもので、型番だけが異なっている。
  - ・株式会社アポワテックの方で、ランプ用に適したものをセレクトし、国際規格適合品（ランプ用）としてカタログに掲載している。
  - ・ボールの硬さについては、「ハード」がよく転がり、「ソフト」になるほど転がりにくくなる。大会では、戦略として硬さの異なるボールを組み合わせて使っている。
  - ・ランプ用が「ミディアム」の硬さだけのものが多いが、手投げ用には「ソフト」のみの製品もある。ランプで使用する場合であっても、ソフトは転がらずに届かないことがあり、ランプでは「ミディアム」が選ばれることが多いようである。
- これらの情報を踏まえたうえで、本校では児童生徒の実態から次の点を配慮し、国際規格適合品（ランプ用）のソフトタイプを選択することとした。
- ・ボールが真っ直ぐコントロールしやすい国際規格適合品の方が、戦略を立てやすく、扱いやすい。

- ・ボールがあまり転がらないソフトタイプが扱いやすい。
- ・見え方にも配慮が必要な児童生徒が多いため、できるだけ近くにボールが止まるソフトタイプが活動の結果を理解しやすい。

最終的に金額的なことを踏まえ、「ハンディライフボールセットJクラシック 12 パネルモデル BC3<ソフトタイプ>」を1セット、及びハンディライフクラシック 12 パネルボール BC3 単品を4つ購入することにした。

## 2 方法

### (1) 検証方法

・ランプを使用し同一条件で、ソフトタイプの国際規格適合品とレク用 (SUNLUCKY SPR520 ミディアム：北海道札幌高等養護学校から借用) を赤・青6個ずつ (計12回) 転がし、転がったボールの距離とコースのずれの平均や標準偏差から比較し、扱いやすさを検証する。なお、ミディアムタイプの国際規格適合品も赤・青2個ずつ (計4回) 測定し、参照とする。

### (2) 同一条件の設定

#### a ランプ (写真1)

- ・スタンダードランプ BC-JB-501 を1台使用する (北海道札幌養護学校白桜高等学園から借用)
- ・高さや角度の調整は行わず、最小の高さで使用する。
- ・27 cmの接手 (小) と 34.5 cmの接手 (ボール乗せの穴付き) を繋げて使用する。



写真1 ランプの状態

#### b ボールの設置と転がし方

- ・ボールはランプのボール乗せの穴に置く。
- ・ボールの印刷されたマークを、縫い目の5角形の先が進行方向に正しくなるように設置する (写真2)。
- ・ボールの自重で転がり始めるように、ボールを最小限の力で押して転がす。



写真2 ボールの設置

#### c 測定方法

- ・ランプの先端を0にして、メジャーでボールの中心部分まで距離をcm単位で測定する。
- ・ランプは体育館のライン上に設置し、ラインからの外れた距離をcm単位で測定する。便宜上、ラインの右側にそれた場合を+、左側にそれた場合を-で表す。

## 3 結果

### a 表1：国際規格適合品 (ランプ用：ソフト)

単位cm

|    | 青①  | 青②  | 青③    | 青④  | 青⑤  | 青⑥    |
|----|-----|-----|-------|-----|-----|-------|
| 距離 | 697 | 825 | 855   | 875 | 885 | 956   |
| 左右 | 1   | -33 | -34.5 | -20 | -1  | -31   |
|    | 赤①  | 赤②  | 赤③    | 赤④  | 赤⑤  | 赤⑥    |
| 距離 | 757 | 803 | 820   | 826 | 830 | 854   |
| 左右 | 10  | 5   | 3     | -8  | -16 | -52.5 |

|      | 距離     | 左右のずれ  |
|------|--------|--------|
| 平均   | 831.9※ | -14.8  |
| 標準偏差 | 61.9*  | 18.8** |

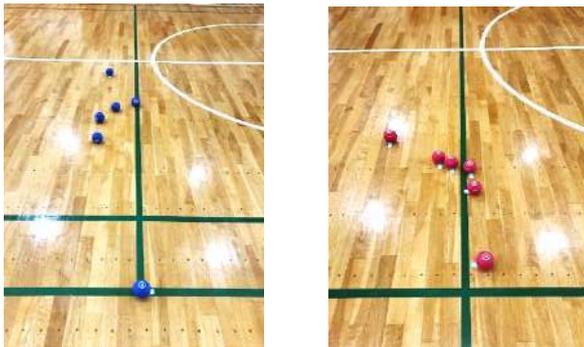


写真3・4 ランプ用（ソフト）

b 表2：レク用 単位cm

|    | 青①    | 青②   | 青③   | 青④   | 青⑤   | 青⑥   |
|----|-------|------|------|------|------|------|
| 距離 | 956   | 1143 | 1163 | 1225 | 1234 | 1329 |
| 左右 | -32.5 | 162  | -20  | 8    | 35   | -15  |
|    | 赤①    | 赤②   | 赤③   | 赤④   | 赤⑤   | 赤⑥   |
| 距離 | 1042  | 1129 | 1268 | 1321 | 1442 | 1616 |
| 左右 | -1    | 2    | -16  | -186 | 61   | -44  |

|      | 距離              | 左右のずれ          |
|------|-----------------|----------------|
| 平均   | <b>1239.0</b> ※ | -3.9           |
| 標準偏差 | <b>169.6</b> *  | <b>76.1</b> ** |



写真5・6 レク用

c 表3：国際規格適合品（ランプ用：ミディアム）

※参照

|    | 青①  | 青②   | 赤①   | 赤②   |
|----|-----|------|------|------|
| 距離 | 890 | 1017 | 1023 | 1183 |
| 左右 | -15 | -45  | 172  | 70   |

単位cm

|      | 距離              | 左右のずれ |
|------|-----------------|-------|
| 平均   | <b>1028.3</b> ※ | 45.5  |
| 標準偏差 | 103.9           | 84.3  |

### 3 考察

微妙な動きによってランプのサイドにボールがぶつかるなど軌道が変わりやすい面があるが、おおむね今回の実験では国際規格適合品＞レク用でボールの精度が大きく変わることが実証された。特にボールが転がる距離については、国際規格適合品（ソフト：平均 831.9 cm）＜国際規格適合品（ミディアム：平均 1028.3 cm）＜レク用（平均 1239.0 cm）と 2 m 程度毎に距離が延びていた。ボッチャの公式競技用のコートが 12.5 m × 6 m であることから、レク用や国際規格適合品（ミディアム）では、エンドラインを簡単にオーバーしやすいことが予想される。そのため本校のようにランプの使用が中心となる場合、距離や左右のブレも非常に少ない国際規格品（ソフト）のボールを用いるのが望ましいと考えられる。

また、レク用のボールの場合、一度右側にそれて大きく曲がってから左側に戻ってくるボールがいくつかあり、実験結果の数字以上にボールが真っ直ぐ転がらなかった。手でボールを転がしたときも、レク用が左右に不安定気味に転がるのに比べ、国際規格適合品は軌道がそれずに真っ直ぐに転がる印象を受けた。ランプの方が手投げに比べてスピードが付きやすく、転がる距離が伸びる傾向があるため、より左右へのぶれやすさが増幅される傾向が指摘される。したがって、児童生徒がねらったところにボールを転がしたり、相手のボールにぶつけてはじいたりしやすくするには、直進安定性の高い国際規格適合品のボールを使うことが望ましいといえる。

バギー等を使用している児童生徒は、(1) 目線の高さが健常者の座位の高さになり、遠くのボールの様子を見渡しにくいこと、(2) 首や顔の向きなどが自在に変えられないこと、(3) 視力などから、投げ終えたボールを見るということに対する制限も多い。そのため自分たちが投げたボールや勝負の行方を児童生徒が理解し訳するためには、できるだけ近距離で止まる国際規格適合品のソフトタイプを利用するのが望ましい。ただし、ソフトタイプはある程度の距離は勢いよく転がり、最後の 50 cm 位で急にブレーキが利いて止まる傾向が見られた。したがってボールをジャックボールに寄せるという戦術に適している傾向が見られた。相手のボールをはじく戦術を取る場合に

は、距離が延びるミディアムタイプ、あるいはハードタイプなどを使用することが望ましいと思われる。

レク用に比べて3～10倍程度の価格差があるが、本校のようなランプの使用が大半となる重度重複障がい児が多く在籍している学校でボッチャを行う場合は、上記の理由により国際規格適合品を使用することが望ましい。その場合はソフトタイプのボールを基本に、ミディアムやハードタイプなどの異なる硬さのボールを戦術に応じて使い分けて使用することを推奨したい。また、ランプと手投げで行う児童生徒が混在している場合には、株式会社アポワテックの担当者が教えてくれたように、さらに硬さの異なるボールを複数種類用意して組み合わせて使用することを推奨したい。

### Ⅲ 研究Ⅱ 実践研究

#### 1 授業の概要

- ・日時 令和3年11月16日(火) 4校時
- ・場所 北海道札幌養護学校共栄分校体育館
- ・参加生徒 中学部・高等部児童4名  
(在籍9名のうち5名が欠席のため)
- ・授業 たいいくタイム  
(領域・教科等を合わせた指導)  
ボッチャの2回目

#### 2 ボッチャのルール

- ・中学部と高等部の2チームに分かれて対戦する
- ・自作教材のランプを利用する
- ・MTの教師が転がしたジャックボールが一番近くにボールを転がしたチームが勝利
- ・人数が多い方のチーム(今回は中学部が3名)が一人2回転がす回数(各チーム6回)
- ・使用したボールは国際規格適合品ソフトタイプ

#### 3 自作教材について

手指の滑らかな動作や肘の中間位の動きが困難な児童生徒が多く在籍している本校では、伝統的に児童生徒がひもを引っ張ることで、ストッパーを外してボールを転がしたり、紙コップに入れた素材をひっくり返して落下させ図工や美術の作品を作ったりすることに取り組むことが多い。そのための自作教材が多く蓄積されており、今回の

ボッチャの授業でも既にある自作のランプ(スロープ)やストッパーを利用した。



写真7 自作ランプ

ストッパーがしっかりと止まりやすいことと、ボールの軌道がそれないようにするためランプの両端には筒がついているとともに、ストッパーが止まる部分には滑り止めとして両端にはウレタン(写真8のピンク入りの部分)が貼ってある。

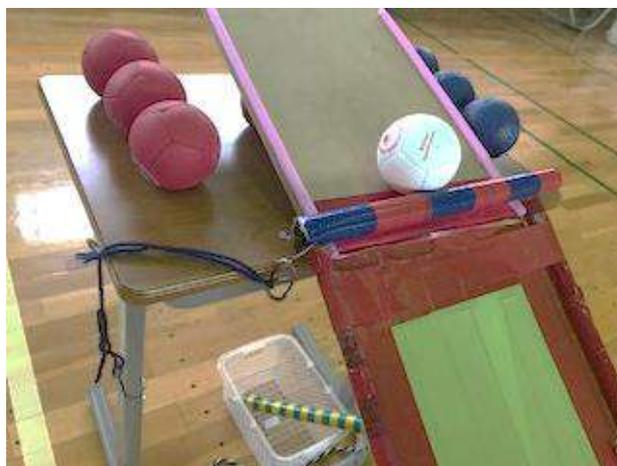


写真8 ストッパー

赤いテープで色がついているランプ(スロープ)部分の長さは1.5m、ピンク色が恥についているストッパー部の長さが38cm、机の高さが64cm、スロープの角度は60°であった。

この紐のついているストッパーを生徒が引っ張り、抜くことでボールが転がるようになっている。なお、生徒の手指の機能によっては、握りやすいようにさらに自作の取っ手を紐に接続して使っているケースもある(写真9)。

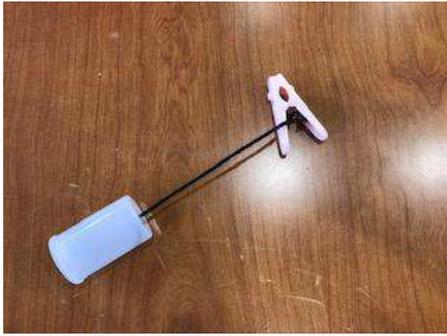


写真9 接続用取っ手



写真12

#### 4 授業の様子

生徒たちは紐を引っ張ることでボールが転がるという原因と結果の関係を、他の学習でも積み重ねてきているため、スムーズに取り掛かることができていた。腕を大きく動かして一人でストッパーを抜きとってボールを転がす生徒（写真10）、STの教師が車いすを後ろに下げることによって紐にテンションがかかっても紐を持ち続けることでストッパーを抜くことができる生徒など（写真11・12）、生徒一人一人の障がいの実態に応じた活動を行っていた。



写真10



写真11

研究1で実験したランプに比べて、今回授業で使用したランプは高さが低く、スロープ部の長さが短いことから、ソフトタイプのボールは概ね4～4.5mの範囲で止まっていた。

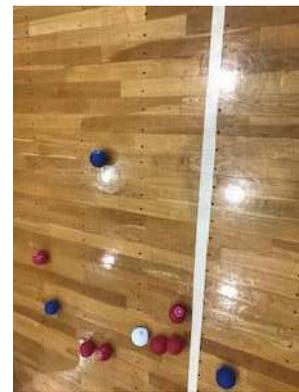


写真13

試合が進んでいく中で、相手チームのボールをはじめ逆転をねらおうという戦術で、ミディアムタイプのボールを使用したことがあった。残念ながらこのときはねらった相手チームのボールのすぐ横をすり抜け、かなり先まで転がってしまった。ミディアムタイプのボールで相手チームのボールをはじめという戦術は、成功すれば成果は大きいですが、それると大外しになるという、リスクの大きな戦術であるということが、教師の間に共有された。

また、最後の2投がそれぞれジャックボールにかなり寄るといふプレイがあった。撮影に使っていたiPadにプリインストールされている「計測」アプリを使うことで、ジャックボールとボールの距離を、実際にボールに触れずに測り、それを参加している生徒に伝えてさらに学習への意欲を高めるといふ使い方をする事ができた。このようなアプリを使うことによって、体育科の内容

に加え、算数・数学的要素を盛り込み、児童生徒にとっての学習活動の充実を図る可能性が示された。

## 5 今後の課題

本校では、以前から教員自作のボールでボッチャを行ってはいたが、今回、公営機材団法人小野寺パラスポーツ振興会の御協力でボッチャのボールを導入し、本格的にボッチャを授業で取り組むことができるようになった。今後も全校的な取り組みをさらに進め、ボッチャを利用した授業づくりのノウハウを蓄積していきたい。

今回の授業実践では、生徒が紐を引っ張ってストッパーを外し、プレイを行うことに重点が当てられていた。しかし、実践を積み重ねていくことで、「どこをねらうか」、「相手のボールをはじくか、それともジャックボールに寄せるか」、「ランプの位置はこれでいいか」などを、生徒と相談しながら決めるというコミュニケーション面の取り組みも進めることができると考える。

また、今年度、北海道札幌高等養護学校の木工科より作業学習で製作したランプの寄贈を受けた。今回は間に合わなかったが、寄贈を受けたランプに改造を加えストッパーを使用できるようにするなど、本校の児童生徒の実態に応じた教材教具の工夫をさらに進めていきたい。

## IV おわりに

今後も校内の教育活動において、積極的にボッチャを推進していくとともに、将来的にはボッチャを利用した共生社会の実現に向けた取り組みも推進していきたい。

1つ目は、交流及び共同学習での利用である。筆者は以前在籍していた特別支援学校で、地域の小学校との学校間交流の際に、ボッチャに取り組んだことがあった。交流相手の小学生には事前学習で「勝負にこだわってください」、「それは味方の失敗を非難するようなことではありません。勝利のためにみんなで作戦を考えながら投げてください」、「養護学校のみんなが投げるときには、ランプを支えてあげたり、コースはこれでいいか確認を求めたりしてください」と伝えていた。障がいの有無に関わらず、全員がチームの仲間として、対等な立場でゲームに臨むことができる、そ

れがアダプテッドスポーツのボッチャの利点であり、交流及び共同学習の題材としてボッチャが適している理由である。

2つ目は、地域のボッチャ大会への学校としての参加である。北広島市内では、少しずつボッチャを普及させようとする動きが出てきており、今年度末には北広島市教育委員会が中心となってボッチャ大会の開催を計画しているところである。新型コロナウイルス感染症が収束するのが前提だが、PTAと相談しながら可能であれば学校として参戦したいと考える。

このような取り組みを通して、地域のボッチャの普及とともに、地域の共生社会の実現に向けて、微力ではあるが学校として尽力していきたい。

## 動画を用いた基礎技術の定着（2）

～【オフ・ザ・ボール】の動きを身に付けるために～

北海道新篠津高等養護学校 教諭 松山佳樹

## I はじめに

北海道新篠津高等養護学校は、開校して29年目を迎えた特別支援学校である。全校生徒は135名で、その内寄宿舎に在舎している生徒は123名である。多くの生徒が部活動に入部し、余暇活動を充実させることができている。

運動系の部活動においては陸上部やバスケットボール部、卓球部などがあり、陸上部は毎年のように全国障がい者スポーツ大会に出場している。サッカー部においては前々年度、北海道代表として初めて全国知的障害特別支援学校高等部サッカー選手権大会に出場することができた。また、文化系の部活動では演劇部の活躍がめざましく、高文連に加盟し過去に全国大会出場を果たすなど、部活動が非常に盛んな特別支援学校である。どの部活動においても非常に熱心に取り組む生徒が多く、学校生活や寄宿舎生活を送る上でも部活動指導における重要性は非常に大きいと感じている。

## II 研究の背景

## 1 背景

本校では、研究部が中心となり校内研究を行っている。昨年度は、二つのテーマを設定している。一つ目が共通研究テーマで「新学習指導要領にあわせた新しいカリキュラムづくり to2020」、二つ目が「未来の授業づくり～新高版学習支援コンテンツの蓄積と活用」である。今年度の研修については、「Google Workspace for Education」の運用をはじめ、オンラインでの学習教材の活用方法等について全教職員で取り組んでいる。昨年度の研究でも触れたが、本校では、生徒への十分な学習の質を担保し、学習機会を保障するため、一人一台ずつタブレット端末（iPad）を購入し、学習や学校行事において活用している。長期休業中には、

各御家庭での協力をいただき生徒がタブレット端末（iPad）を持ち帰り、共有の教材や課題に取り組むことができるよう、学習環境を整備している。また、タブレット端末（iPad）の効果的な活用によって、動画コンテンツなどの教材も手軽に視聴することができるなど、生徒が主体的に教材に触れる機会が格段に増えている状況である。情報機器の操作という点では、教職員よりも詳しい生徒も多く、調べ学習での内容をアプリでまとめたり画像を加工するなどの技術面で力を発揮できる生徒も目立ってきた。

さらに、360度カメラやドローンを活用し、生徒の学習の様子を記録することで振り返りや行事などの事後学習に活用する取組も行っている。6月に行われた体育大会では、実際にドローンを使用し、競技の様子を撮影することで臨場感溢れる動画が記録でき、事後学習や保護者懇談会で視聴してもらうなど、多様に活用することができた。ドローンの撮影においては、空中からの俯瞰の映像が撮影でき、全体に焦点を合わせながら、個人をピックアップして捉えることができる利点がある。それによって、体育大会の陸上競技の場合、客観的に自分達の姿勢やフォームを確認できることに加え、他者と比較できたり、リレー種目ではレース展開が読み取れたりするなど、振り返りの学習で非常に効果的であった。

サッカー部では、実際にゲーム形式の練習場面でドローンを使用して撮影を行った。斜めからの空中の映像が非常に分かりやすく、生徒やボールの動きがとても見やすいため、振り返りの素材として、非常に重要な資料とすることができた。何より生徒自身が自分達の動きを客観的に確認することができるため、「次回はこうしてみよう。これが駄目だった。」など自己反省ができる利点があると感じた。

【写真1 ドローンの撮影による映像①】



【写真2 ドローンの撮影による映像②】



昨年度の研究では、「動画を用いた基礎技術の定着（1）」というテーマで基礎技術に重点を置いて研究を進めた。動画を用いることで身体の動かし方やボールに当てるポイントなどを視覚的に理解することができ、基礎技術の向上に繋げることができたと感じる。実際に、上級生と新入生を比較しても基礎技術における差は顕著であり、視覚的なツールの活用と積み重ねによる反復練習の大切さに改めて気付くことができた。

今年度の研究では、昨年度の基礎技術の向上（ボールを持っているときのプレー）に加え【オフ・ザ・ボールの動き（ボールを持っていないときのプレー）】に着目し、生徒の理解と定着を狙って研究を進めたいと考えた。本研究の前に、【オフ・ザ・ボールの動き】について触れておきたい。

サッカーは、1個のボールで22人がプレーするスポーツである。一人当たりのボールに触っている時間は、90分のうち2、3分程度と言われている。つまり、ほとんどの時間がボールに触れていない、【オフ・ザ・ボール】の状態であると言える。そのため、ボールを持っているときのプレー（オン・ザ・ボール）だけでなく、ボールを持っていないときのプレー（オフ・ザ・ボール）を習得することで、個々のレベルでより楽にプレーできたり強いチーム作りができる可能性が高くなると考えられる。

現代サッカーでは、コンパクトなディフェンス

が主流になったことで、攻撃側のスペースが狭くなっている。狭いスペースの中で効果的な攻撃のためには、【オフ・ザ・ボール】の動きは欠かせない。オフ・ザ・ボールの重要性が増しているのは、ディフェンスのレベルアップとの関連性が大きいと言われている。

以前のサッカーではプレッシャーがそれほど強くなかったため、【オフ・ザ・ボール】の動きがそれほど重要視されていなかったが、現代サッカーでは守備側がコンパクトになっているのでボールを受けてから次のプレーをするまでの時間が非常に短くなっている。

そのため、攻撃側はボールを受けるまでにより効果的な【オフ・ザ・ボール】の動きをすることで、自分がプレーするためのスペースと時間を作り出す必要がある。ボールを受ける前に準備しておくことが、より良いプレーに繋がると考えられている。

## 2 目的

今年度も昨年度に引き続き、校内で取り組む研究テーマである「未来の授業づくり～学習支援コンテンツの蓄積と活用～」をサッカー部の練習の中で生かすことができないかを考えた。昨年度の研究で動画を活用することの効果を感じることができたため、今年度も指導者で動画を作成し、それを生徒に提示して、具体的な身体の動かし方や理由付けについて学習会を行った。

生徒たちには、まず正しい【オフ・ザ・ボール】について理解を促す必要があった。「オフ・ザ・ボール」と聞くと、ボールを受けるためにマークから外れる動きやディフェンスラインの裏に飛び出す動きが最も想起されるが、オフ・ザ・ボールは必ずしも「動く」ことだけではない。ボールを持っていない選手が正しい判断をするためには、

「①見る（考える）」、「②判断する」、「③実行する」という3つのプロセスが重要になる。周囲の状況を確認し、判断するための情報を集め、次のプレーを決めてそれを実行する。これが効果的な【オフ・ザ・ボール】の基本である。あくまでもこれは基本であり、これに加えチームメイトや相手の動きまでも視野に入れて考えながら判断することが求められる。そして、刻一刻と変化する瞬間の連続の中でプレーを選択することになり、決まっ

たパターンはほとんどない。経験の中でカバーできることもあるが、それは高いレベルの中で熟練したトレーニングや高い強度での試合経験によって身に付くと考える。

コロナ禍の状況では、対外試合等を実施する機会設定も困難であるため、試合経験を積むことが難しい。実際に昨年度からチャレンジドサッカー連盟が主催する大会は行われることがなく、試合の機会が得られない状況が続いているのは事実である。部活動の中では、練習の中で試合形式のトレーニングを取り入れることしかできないが、その中で【オフ・ザ・ボール】が意識できるよう指導を進めていきたいと考えた。

また、正しい【オフ・ザ・ボール】の3要素と言われる「①見る（把握する）」、「②判断する」、「③実行する」というこのプロセスこそが、卒業後に社会で生き抜いていくために必要な要素であるとも考えた。特別支援学校高等部は、3年間充実した教員数や寄宿舎指導員数の体制によって教育や生活指導を受けることができるが、卒業後社会人としての生活では主体性が求められる。この主体性とは、「自分の意志や判断に基づき責任をもって行動すること」である。

高等部3年間の学校生活や寄宿舎生活で主体性を培うためには、様々な学習や学校行事等を体験することが大切である。学習以外にも部活動にこそ主体性を身に付けるヒントが隠されていると考える。そして、本研究で取り入れる【オフ・ザ・ボール】の3つのプロセスこそ、主体性を身に付ける上で重要なキーファクターになると感じる。

サッカーという競技における重要な動き方である【オフ・ザ・ボール】を生徒に指導すると同時にオフ・ザ・ボールにおける「①見る（握する）」「②判断する」、「③実行する」という重要なプロセスを今後の学校生活やさらには社会人として大切に生活してほしいと願い、本研究を実践することとした。

### Ⅲ 実践研究の内容・方法

昨年度と同様に、まずは【オフ・ザ・ボールの動き】の要素を取り入れた動画を教職員で撮影し、動画編集を行った。撮影については、iPadを活用し、撮影から編集までを行った。昨年度の基礎技

術の向上では、なるべく生徒目線での視界からの撮影を意識したが、今年度については動き方の理解となぜそのような動きが効果的なのかを客観的に捉えてもらうために、二つの視点（①正面からの視点、②側面からの視点）から撮影をした。

#### 1 「ボールを受ける時の体の向きと視野の確保」

前述したとおり、オフ・ザ・ボールの重要性が増しているのは、現代サッカーでは守備側がコンパクトになっていることに関係している。コンパクトになっているということは、それだけ一人一人のプレーするスペースが非常に狭くなっていることが考えられる。そのため、攻撃側はより効果的なオフ・ザ・ボールの動きでプレーするためのスペースと時間を作る必要がある。

この動画では、ボールを受ける時の体の向きを意識することを強調した。ここで【半身】というキーワードが出てくる。半身で受けるということは、ボールと相手が見えるような体の向きを意味している。半身になることで首を少し振れば、相手がどこにいるかを見ることができる。また、相手のみではなく、半身で視野を確保することでチームメイトの動きまでも見ることができ、次のプレーに対する判断材料を得ることができる。さらに、半身を意識することができていれば、両足が横並びにそろうことなくなるため、次の動作に移りやすくなる。生徒達には、まずはこの半身を意識、実践できる必要があった。部活動の練習の中で、基礎練習として二人一組でパス交換をさせるメニューがよくあるが、半身を習得すると単純なパス交換の練習時においても半身で受けようとする生徒が増えた。さらに、ボールを受ける前に首を振って相手を見るという準備についてもパスを受ける前に、首を振って見ている生徒が少しずつ増えてきた。

トップアスリートのサッカー選手は、試合中によく首を振って周囲を見ていることに気付くだろう。先の東京五輪2020でサッカー男子をベスト4に導く原動力となった日本代表の久保建英選手は、試合中かなり首を振って視野を確保している映像がよく話題に取り上げられる。

特別な身体能力をもち合わせている訳ではないが、久保選手が世界で渡り合うことができているのは、【オフ・ザ・ボール】の重要性を明確に理解しているからだと考える。幼少の頃からバルセロナのカンテラ（下部組織）に所属し、技術的にもメンタル的にも超一流であることは間違いないが、そんな久保選手でもボールを持っていない【オフ・ザ・ボール】の時の徹底した準備が、ハイパフォーマンスに繋がっているのは間違いないと感じる。効果的な【オフ・ザ・ボール】で準備をしているからこそ、視野を確保でき、チームメイトや相手の動きを瞬時に把握することができる。把握ができているからこそ、その瞬間瞬間で最適なプレーを選択することができると思っています。

生徒に伝える際に、まずはボールに正対するのではなく、「半身」でボールを受ける練習に取り組むことを意識するよう伝えた。半身を意識できるようになると次のステップとしては、首を振って見ることである。ここで重要となるのは「見るタイミング」である。常に、周囲を見渡すことができるように、いつでもどのタイミングでも相手や味方の状況を把握するために見ることも大切である。GKやDFのように、試合中に全体を見渡せるポジションであればそれは可能だろう。しかし、ここで取り上げる「視野の確保（見る）」とは、狭いプレーエリア（FWやMFが相手を背負っていたり相手の背後を奪ったりしようとする場面）で「見る」ことである。このような場面では、ボールを受ける前（味方がパスを出す前）や味方からのパスが来る直前（味方からのパスでボールが転がっている間）に半身で視野を確保する必要がある。ボールがくる間に周囲を見て、トラップする時にはボールを見るという単純に思える動作でも、慣れていないと非常に難しく、生徒達も最初は苦勞を強いられた。そのため、シンプルな基礎練習の対面パスでも、ボールを受ける前には首を振って周囲を見るよう意識付けをした。生徒によっては、なかなか意識ができず、ボールが転がってくる間もボールだけを見つめてしまうことが多かったが、練習を繰り返すことや言葉掛けをすることで、少しずつ意識できる生徒が増えていった。この段階では、できていることよりも

「意識が強まっている」ということが非常に重要であると感じる。なぜならば、プレッシャーの無い単調な練習の中で意識することができなければ、相手からのプレッシャーが掛かる試合の中では難しい可能性が非常に高いと考えられるからである。基礎技術の練習と聞くと単純でつまらなく感じる生徒も多いが、この段階でいかに状況をイメージして意識しながら練習に取り組むことができるかが重要になると改めて感じることができた。



【写真3 オフ・ザ・ボールの動き（半身）①】



【写真4 オフ・ザ・ボールの動き（半身）②】



【写真5 オフ・ザ・ボールの動き（半身）③】



【写真6 オフ・ザ・ボールの動き (半身) ④】



【写真7 オフ・ザ・ボールの動き (半身) ⑤】



【写真8 オフ・ザ・ボールの動き (半身) ⑥】



【写真9 オフ・ザ・ボールの動き (見る) ①】



【写真10 オフ・ザ・ボールの動き(見る)②】



【写真11 オフ・ザ・ボールの動き(見る)③】



【写真12 オフ・ザ・ボールの動き(見る) ④】



【写真13 オフ・ザ・ボールの動き(見る) ⑤】



【写真14 オフ・ザ・ボールの動き(見る) ⑥】

## 2 「ボールを受ける時の角度を意識する」

次の動画では、「角度を付けてボールを受ける」必要性について解説をした。角度を付けるということは、ボールに対して真っ直ぐ受けるのではなく、斜めで受けるということである。角度を付けるメリットは、「①マーカースの状態を見やすくする」こと、「②パスミスカバーしやすくなる」こと、「③常にゴールを意識すること」である。①は、自分の視野に相手をいれておけば、プレッシャーを受けたとしてもかわしたりパスを選択したりすることができる。②は、味方からのパスが少しずれてしまっても対応できることであり、これによってパスミスへのリスクヘッジになる。角度を付けずに真っ直ぐボールを受けてしまうと、パスがずれて足が届かなかったり無理な体勢でトラップをしたりしなければならなくなり、ミスが起こる可能性が高くなる。③は、角度を付けて半身を意識することで、

身体を開いてボールを受けることができる。それにより、ゴールを意識したトラップができ、攻撃方向を常に意識することができる。つまり、「前を向く」ことができる利点がある。「前を向く」ことができているならば、自分へのマーカー（相手）も同一視野に入れることが可能となる。ゴールとマーカー（相手）が見えていれば、ドリブルで仕掛けたり、縦パスを入れたりするといった積極的なプレーを選択しやすくなる。反対に角度を付けずに真っ直ぐボールに寄ってパスを受けようとすると、相手ゴールに背を向けた状態になり、前を向けなくなる。そうすると、相手もゴールも視野に捉えることができなくなり、マーカー（相手）からのプレッシャーを受けやすく、パスがずれた場合にも対応できなくなり、ボールを失ってしまう。角度をつけずに真っ直ぐボールに寄って受けってしまうと、相手からのプレッシャーを受けやすいことと、トップスピードでボールを扱うことになってしまうことが考えられる。前者と後者に共通して言うことは、どちらもミスが発生しやすいということである。角度を付けてボールを受けることで、自分のプレーする空間と時間を作り出すことができるのと同時に、視野が開けて選択肢を増やすことができる。



【写真 15 オフ・ザ・ボールの動き(角度) ①】



【写真 16 オフ・ザ・ボールの動き(角度)②】



【写真 17 オフ・ザ・ボールの動き(角度)③】



【写真 18 オフ・ザ・ボールの動き(角度)④】



【写真 19 オフ・ザ・ボールの動き(角度)⑤】



【写真 20 オフ・ザ・ボールの動き(角度)⑥】



【写真 21 オフ・ザ・ボールの動き(角度)⑦】



【写真 22 オフ・ザ・ボールの動き(角度)⑧】



【写真 23 オフ・ザ・ボールの動き(角度)⑨】

### 3 「相手の視野から消えてボールを受ける」

次の動画では、「相手の視野から外れてボールを受ける動き」について解説をした。フリースペースが狭くなっている現代のサッカーにおいては、相手の視野から消える動きが必須であると言って良いほど重要である。【視野から消える】ということは、相手がボールを見ている隙に抜け出すということだが、生徒達に説明する場合には、【動き直すこと】が重要であることを説いた。引いてボールを受けられないから裏のスペースへ抜け出す

【動き直し】が重要であることを強調した。特別支援学校に限られたことではないかもしれないが、練習や試合では、パスを出して自分の役割が終わりと感じている生徒や、動いてパスを受けようとしても相手がついてきてしまい、そのまま受けてボールを失ったり、自分は受けられないからといってそのままプレーに関与しなかったりする生徒

が多く見られる。また、動き直しをすることに慣れていない生徒も多く、練習の場面では足がもつれて前進できなかつたり、タイミングが遅れて相手に追いつかれてしまつたりする様子も見られた。まずは、ボール保持者に対して関与する意識をもつことや一度の動きで無理ならば、さらに動き直しをして局面を打開しようとする考えをもつことを生徒たちに伝えた。【動き直し】が難しい生徒には引いてもらえない時は、バックステップを踏み、体の向きをコントロールしてゴールの方向へ意識付けを行うように説明をした。また、相手の裏を取る場面では、スピードよりもタイミングが大切であることを意識させ、パスを出す選手と受ける選手のコミュニケーションがより重要であることを再確認させることができた。

反対に、相手が自分に付いてこない場面では、引いて足元でボールを受けてからプレーする選択肢もあることを伝えた。その場合はフリーでプレーすることができるため、ドリブルやパス、またはシュートなどの選択肢から自分で判断することが大切である。相手の状況によって判断を変えるためには、【1「ボールを受ける時の体の向きと視野の確保」】でも説明した通り、ボールを受ける前に首を振って相手や周囲の状況を見ておくことが求められる。特に、今回の【視野から消える動き直し】については相手や周囲の状況を見ることが非常に重要である。生徒達には、相手の状況を見ながら判断を変えて動き直すというレベルまで求めることは少々困難かもしれないが、まずは一つの動きで難しければ【動き直す】という意識付けを徹底することがとても大切だと感じた。それを繰り返すことで、自分達が余裕をもってボールを保持することができたり、よりゴールに近い生徒への有効なパスが出せたりするなど、ゴールに直結するプレーの選択肢を増やすことができるようになると感じた。



【写真 24 オフ・ザ・ボールの動き(消える)⑩】



【写真 25 オフ・ザ・ボールの動き(消える)②】



【写真 26 オフ・ザ・ボールの動き(消える)③】



【写真 27 オフ・ザ・ボールの動き(消える)④】



【写真 28 オフ・ザ・ボールの動き(消える)⑤】



【写真 29 オフ・ザ・ボールの動き(消える)⑥】



【写真 30 オフ・ザ・ボールの動き(消える)⑦】



【写真 31 動画を活用してのミーティング①】



【写真 32 動画を活用してのミーティング②】

#### IV 実践研究の成果と今後の課題

##### 1 実践研究の成果

今回動画ツールを製作するにあたり、まずは撮影を行う教職員での共通理解を行った。【オフ・ザ・ボールの動き】とは何か、なぜ【オフ・ザ・ボール】が必要なのか、それがどのような意味をもたらすのかなどについて、参考文献を資料として確認する作業を行った。それにより撮影も目的とする内容で行うことができ、また練習で生徒達に声を掛ける場面でも、指導者側が自信をもって指導することができたと考える。動画の編集では、映像として見返すことで、効果的な指導に繋がる一つ一つの動作のポイントを整理することができた。それによって、より具体的に生徒達に説明することができ、指導者が実演している映像で、生徒達もより理解が深まったと感じる。

一年間を通して、【オフ・ザ・ボールの動き】に

ついて、生徒達に説明をしながら練習に取り組むことができた。常に意識させたことは、やはりボールを受ける前の「準備」である。昨年度の研究で記した通り、全国的障害特別支援学校高等部サッカー選手権大会の出場から他地域のレベルの高さや基本的技術の大切さに改めて気付くことができた。基本技術については、反復して練習に取り組ませる重要性を理解しつつも、日々の部活動は基礎や基本的技術にばかり時間を割くことができず、さらにコロナ禍における現在の状況では対外試合を頻繁に行うこともできない現状である。そのような中で、どのように実戦で身に付けられる技術を生徒達に指導できるかを模索し、【オフ・ザ・ボールの動き】に着目し、映像等を活用しての指導を進めてきた。ボールを受ける前の準備では、「首を振って周囲を見ること」が大切であることを生徒に何度も伝えてきた。【オフ・ザ・ボールの動き】で最も大切なことは、「見ること」であり、基本技術のパス練習などでも生徒達は意識することができるようになってきた。今までボールだけを目で追っていた生徒達が、ボールを受ける前に周囲を見渡すようになり、それだけでも今回の研究が成果として表れていたと感じる。試合形式の練習では、今までボールが来ると闇雲に蹴り返していた生徒がパスを繋ごうと意識することができるようになってきた。周囲が見えているからこそ味方がどこにいるか分かり、パスを繋ごうとする判断ができたことは、非常に大きな進歩であると考え。パスをカットされることももちろんあるが、パスを繋いで攻撃しようとする意識が増えたことで、ダイレクトのパスやスペースで受けようとする動きが多く見られるようになり、チームとして厚みのある攻撃を仕掛けられることができるようになってきた。ダイレクトのパスができるということは、それだけ周囲の状況判断ができていることと味方の動きを理解することができているということになり、正に出し手と受け手の【オフ・ザ・ボール】が成立している証拠だと考える。

今年度については、映像での振り返りによるミーティングを実施し、さらなる意識付けや定着を図った。映像による振り返りでは、ドローンの映像や試合形式の映像を流して一人一人の動きやどんな狙いでプレーしたかを確認した。場面によっては映像を停止し、なぜこのようなプレーをした

か、もっと正しい判断はなかったかなどについて、次に生かせる前向きな反省会を実施することができた。生徒達一人一人にどの程度、その映像が残っているかは判断できないが、自分のプレーを客観的に振り返ることでプレーの判断だけでなく、体の動きや自己の課題などを整理することができたと感じる。特に、空中からの俯瞰映像では相手や味方との距離感やスペースの使い方、ボールの動かし方などを整理することができる有効なツールだと感じた。

12月に実施した対外試合（石狩管内の特別支援学校との練習試合）では、フットサルで実戦形式の練習を行うことができた。試合の中で、全員が【オフ・ザ・ボールの動き】を意識することはまだ難しかったが、フリーの生徒にボールを繋いでゴールまで奪ったり、相手の背後でボールを受けようとするなどの手応えを感じられる場面も見られた。また、ボールを受ける前に味方がどこにいるかを把握するために周囲をよく見ている生徒が増えたことは、研究の成果だと感じた。練習形式ではなく、対外試合という真剣勝負の経験でできたことは非常に貴重であった。



【写真 33 オフ・ザ・ボールを意識した練習①】



【写真 34 オフ・ザ・ボールを意識した練習②】



【写真 35 練習試合の様子①】



【写真 36 練習試合の様子②】

## 2 今後の課題

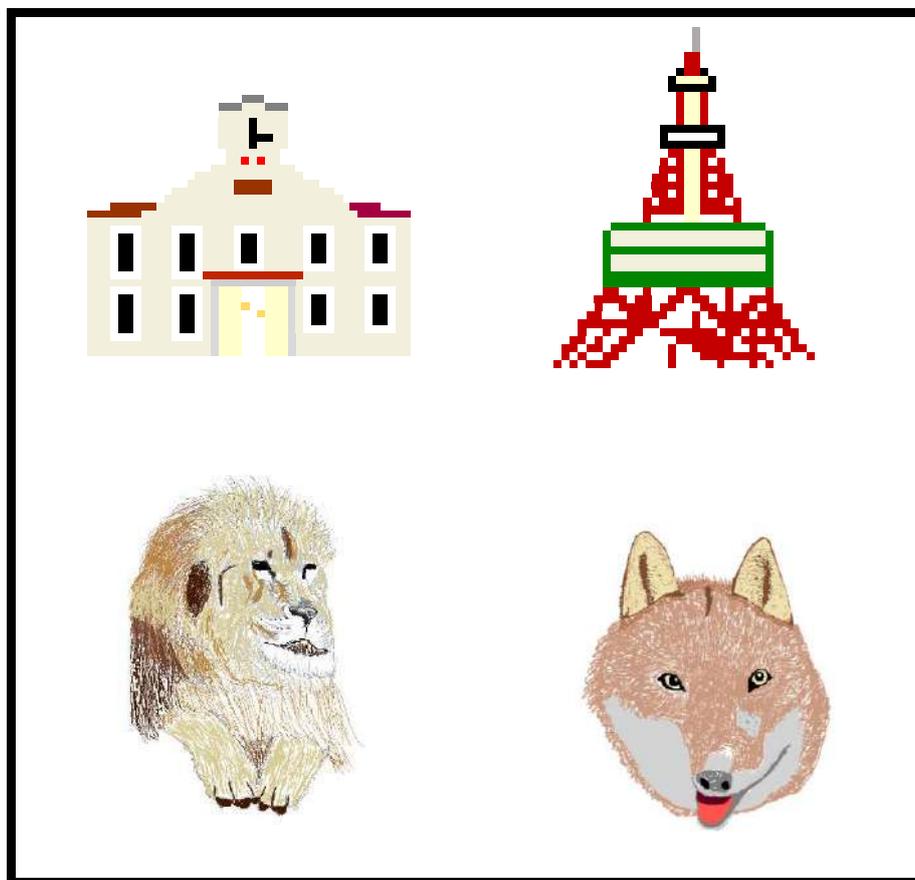
今回のテーマである【オフ・ザ・ボール】については、ある程度の基礎技術（ボールを止める、蹴る）が身に付いている想定で取り組んだものである。高等養護学校の部活動では、毎年メンバーが入れ替わり、さらに経験者の割合が圧倒的に低い現状にある。この状況で、サッカーの基礎を指導しながら、発展させた内容まで指導するのは、レベルに応じたメンバー構成やかなりの時間が必要になり、週2回の部活動では少々難しさも感じている。

動画については、今年度は昨年度の基本技術から発展させた内容で【オフ・ザ・ボールの動き】について動画を活用して指導を行った。今回は、試合中の場面設定などをしないままにボールを受ける前の準備や心構えなどに重点を置いたが、今後は場面を限定したり詳細な状況設定をしたりした上でどのようなプレーの判断をすべきかなどの動画ツールを製作していきたい。

本研究である、【オフ・ザ・ボール】の3要素である、「①見る（把握する）」、「②判断する」、「③実行する」という3つの効果的なプロセスがサッカーのみならず、生徒達の将来の社会生活に生かされることを切に願い、本研究のまとめとする。

## V 引用・参考文献等

- (1)「最速上達サッカーオフ・ザ・ボール」  
村松尚登 監修 成美堂出版
- (2)「考える力を身につけるサッカー練習メニュー100 戦術の基本と応用」  
島田信幸 監修 池田書店



表紙・裏表紙デザイン 北海道手稲養護学校三角山分校

表紙：高等部1年 熊谷 空

裏表紙：中学部3年 伊藤 聖矢

2年 和田 輝政

(令和3年11月まで在籍)

現：音更町立共栄中学校)



発行：公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会